
影乱の紅

阿戯 リノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影乱の紅

【Nコード】

N0902V

【作者名】

阿戯 リノ

【あらすじ】

紅は、十六となつて結婚をしなくてはならなかった。

それは、女の長として産まれた宿命なのかもしれない。だが、紅はそれが嫌だった。何故、自分が好きでは無い人と結婚などしなくてはならないのか？

そんな時、結婚相手唯一の候補であつた鬼月に結婚を断られる。そして、自分を長と認めさせる決意をした。それと同時に、何かの目的を持った風臨一族が現れた。

風臨一族と影乱一族のお話・・・？ それと、紅は誰に好意を持

つかと言つお話・・・？ です。一応こんな感じの流れです。・・・
・多分。Pixivにも投稿したのですが、こっちにも投稿してみしました。

感想をくれると嬉しいです。文章力が無いので、話の方は全然駄目なのかもしれません・・・。よろしく願います。

第壱話

影乱一族。

それは、鬼の血を引いた一族と言われ、最強となった一族。

逆らったら終わり。影乱に滅ぼされしまう。それ程に力があると言われてきている。実際、影乱一族の者が戦争にいれば刀一つで終らせた事があるとかないとか。

そんな一族の現、長。影乱紅。えいらんぐれない

父を早くに無くし、十になる時にはすでに影乱一族の長となっていた娘だ。

刀の実力があり、先頭を切る才能もあった。まさに、影乱一族の長に相応しい。だが、紅には一つ問題があった。それは、紅が女だという事。

女が長となつて良いものか。代々影乱一族の長は男が勤めている。その為に、紅は十六までは長という事になった。

十六になったら、契りを交わし、その契りを交わした相手が長となる。つまり、紅はそれまでの繋ぎ。代わりなのだ。それが、紅の役目。

* * * * *

朝。紅が十六となるまで後三日。

紅は髪を結び、着物を着て刀を腰に付ける。着物は男ものだ。外見は男に見えるが、紅の美貌は失われない。誰もが、美しいと思う。長い廊下を歩き、皆が集まる集いの部屋へと向かう。

(後、三日・・・)

拳を握り締め、紅は決意したように、ある襖障子の前で止まり、大きく音を立てて開いた。

十五畳の和室の両側にずらりと一族の者が並んでいる。一族の者

達は一斉に紅の方を見た。

「遅れてすまない。始めよう」

早歩きで段差となっている場所まで行く。敷かれた座布団に座った。

長の席、紅のすぐ横には、正座している補佐の咲斗さくとがいる。

右目が前髪で隠れ、少し怪しい雰囲気を出している咲斗。顔は美形で、紅の横にいても恥ずかしく無い。服装は薄紫色の着物だ。

「本日は、紅様の契りを交わす相手……つまり結婚相手を決める為に集まっていたきました。紅様、ご希望はおありですか？」

感情が籠っているとは思えない淡々とした声で咲斗は問う。何を思っているのか、読めない男だ。

「私より強い者でなければ認めない。長として、相応しくなければならぬのだ。これぐらい良いだろう。それに、女わたしに負けているようでは、長は務まらない」

紅は言い切り、咲斗の方を見た。文句は言わせないと目で訴えている。

「それでは、異議のある者は？」

誰一人として反論しない。嫌、出来ない。紅の意見は最もであるからだ。長となる者が女に負けているようでは、他の一族に弱みを見せていると同じなのだから。

「異議は無いという事で。紅様より強き者を知る者はいるか？」

これまた、誰一人言葉を発しない。紅より強い者など誰も知る訳が無いのだから。

（これで、いい。このまま話しが終れば……）

「いるぞ」

「！？」

一族の中の一人が、口を開いた。善時よじときだ。

三十代後半で、白髪交じりの黒い髪で少し老けて見えるが、義時は一族の中で、頭が切れる優れもの。今までも何度か名案を出し、助けてくれた者である。

「その者の名は？」

「風臨鬼月」
ふうりん きつき

（鬼月・・・だと？）

眉間に皺を寄せ、咲斗は義時を睨む。他の一族の者も同じだ。

「鬼月が何者か忘れた訳では無かるう」「何故、鬼月を選ぶ」「鬼月は裏切り者の息子だぞ」「そうだ。紅様の子に裏切り者の血を混ざる気か」「正気とは思えず、義時」「もっと違う者を選ぶべきだ」「私の息子こそが相応しい」「何を言う、私の息子の方が」
段々と違う話になってきた。それを、義時は楽しむように眺めている。

「はあ・・・」

紅は呆れて、ため息を漏らした。そして、柄を握って鞘に収めたまま、畳に鎧を叩き付ける。【鎧は鞘の先端部分】

しいんと静まり返った。

「黙れ。結婚相手の正式な候補として鬼月を入れる。異論は認めない」

「ですが、鬼月は裏切り者の血を引いているのですよ？そんな者が長となって皆が従うとは」

「黙れと言ったのが聞こえなかったのか？」

咲斗の言葉を遮り、紅は重く、冷たい言葉で黙らせた。

紅い瞳が咲斗を捕らえている。

「・・・申し訳、ありません」

「もう、良い。それでは、私は鬼月を候補に入れる。明日、咲斗と共に鬼月の下に行く。以上だ」

呆然としている皆を無視して、紅は部屋から去って行った。

「ふう・・・」

集いの部屋から去った紅は、ある茶屋にいた。

みたらし団子とお茶を頼み、今はそれを待っている状態だ。ポーツと空を眺めている。

（鬼月、か・・・）

風臨鬼月。

影乱一族の裏切り者、影乱^{えいらん}華蓮^{かれん}と風臨^{ふうりん}獅氣^{しき}の息子。

契りを交わす場合、影乱一族では純潔の血を守る為に一族内でしか認められず、破れば裏切り者となる。だが、華蓮はそれを無視し、風臨一族の獅氣と契りを交わした。だから、華蓮と獅氣の間に生まれた鬼月は裏切り者の息子として扱われ、影乱一族に受け入れられる事は無かった。さらに、裏切り者の華蓮と獅氣は殺され、孤独の身となってしまった。誰もがすぐに力尽きて死ぬだろうと思っていたが、鬼月は一人で遅く^{たくま}生きてるんだから、強いんだろうな……。まあ、負ける訳にはいかないが）

色々と考えている内に、茶屋の娘がやって来た。

「お待たせしました。みたらし団子とお茶です」

笑顔が可愛らしい茶屋の娘。紅と同じようにポニーテイルにし、花柄の着物を着ている。片手にはみたらし団子とお茶の乗ったお盆があった。

「有難う」

みたらし団子とお茶を受け取り、笑顔を向ける紅。すると、娘は頬を赤らめた。恐らく、紅を男だと思つて意識しているのだろう。そんな事はお構いなしに、紅はみたらし団子を口に運んでいく。

「あ、あのっ。お名前は・・・」

「・・・名など無い。今はな」

そう、今は一族の長としての紅では無く、一人の紅としていた。ただの紅として。

「今は・・・？」

キョトンとして、娘は首を傾げた。

紅は小さく笑う。その仕草に、娘はまた頬を赤らめる。それだけ紅が美しいという事を示していた。

「・・・お前は、今幸せか？」

「え、あ．．．はいつ。とても幸せです。私は茶屋の娘で、父と母がいて平和で．．．こんな当たり前の日常が幸せです」

本当に、幸せそうに笑いながら、娘は話した。それが、紅にとつては羨ましくて．．．。

「あ、でも。今の日常があるのは、ここの領地の影乱一族の長が頑張ってくれているおかげだと思っています」

娘の言葉で、紅は救われた気分になった。自分に感謝してくれている。長として、認められている。それが、嬉しかった。

「そうか．．．。．．．ご馳走様、美味しかったよ」

全て平らげたところで、紅は椅子にお金を置き、笑顔でどこかへ歩いていった。

そんな紅を見送った後、娘はお代を確認する。

「あれ？これ、多い．．．」

* * * * *

（全く．．．。紅様はどうして鬼月と．．．）

咲斗は苛立ちながら、自分に与えられた仕事をこなしていた。

一族の者達がどんな事をしたのかという確認や、罪を犯した者にどんな成敗をするかという事を決めたり、紅宛にやって来た手紙の確認など。紅を支える地位にいる咲斗の仕事は少し（？）多い。そして、今日は鬼月宛てに手紙を送るという仕事もある。鬼月に手紙を出すという事には問題無いのだが．．．咲斗にはその内容が重要なのだ。

（なぜ、俺が鬼月に紅様の結婚を頼まなくてはならない．．．）
つい、手に力が入ってしまった。

文を書いている途中で、バキツという音を立てて筆が半分になった。

「．．．俺らしく無い」

こんなに動揺するなんて。

頭を冷やそうと、咲斗は部屋から出て行った。

木刀が、風を切る。

現在、咲斗は影乱一族しか使えない武芸を鍛える為の場所、武道場にいた。そこで、素振りをしている。自分の役目を思い出しながら。

咲斗の先祖は、代々長の補佐。本当は、咲斗の兄、咲夜さくやがなるはずだった。が、咲夜は突然行方不明になり、死んだという事になった。その為に、咲斗が補佐となったのだ。

昔は、紅の遊び相手として咲斗も咲夜も傍にいた。だが、長が死んで紅が長となったその瞬間から、咲斗は補佐。もう、遊ぶ事もなければ気軽に話しかける事も無い。自分は役目を果たさなくてはならない。消えた兄の代わりにも。

「・・・」

大きく、そして素早く一振りして、咲斗は汗を拭う。静まり返った武道場。咲斗は自分が紅に対して抱いている感情を押し殺すように、唇を噛んだ。少し、血が滲む。

その血の味を確かめ、咲斗はまた素振りを始めた。

* * * * *

(三、七、十・・・十五か)

建物並ぶ大通り。紅は、背後に感じる敵の気配を感じていた。だからといって焦る訳では無く、ただただ歩く。手を刀の柄にそえて。

「紅兄ちゃんっ！」

不意に、背後から声をかけられた。

紅はゆっくり目を向ける。そこには、幼い少年少女達がいた。

満面の笑みで、紅を見ている。

「久しぶりだな、お前達」

目線を会わず為にしゃがみ、紅は一番手前にいた少年の頭を軽く撫でた。

「あんねっ…紅お兄ちゃん中々来ないから、皆心配してたんだよっ」

「悪いな、中々仕事が終わらなくてな」

「紅兄ちゃんの仕事ってどんな仕事？」

今、目の前にいる少年少女含め、一族の者以外は殆ど紅が長だということを知らない。だから、男として気軽に紅に話しかけている者も少なくない。最も、よく一族の屋敷から抜け出している紅だからこそなのだが。

「それは秘密だ」

「えっ」

ただの紅として見てくれる町の人達は好きだった。だから、知られたくは無い。もし自分が長だと知れ渡れば、離れて行ってしまう…。それが、怖いのだ。

（…近付いてきてるな。この子達も巻き込むつもりか？）

近づく敵の気配に、紅は警戒を高める。

「すまない。今日はまだ用事があるんだ。だから、お前達は家に帰った方が良く」

「もう、行っちゃうの…?」

一番小さな少女が紅の服を掴んでいた。涙目で、紅を見つめている。さすがの紅も少しうろたえてしまった。

「ま、また来る。約束だ、絶対に来るから」

「うんっ」

一瞬に表情が明るくなり、少女は服を離した。ホッと安堵する。

「では、またな」

「またねー!」

少年少女達が見えなくなっただけで、紅はなるべく人気の無い場

所へと急ぐ。まだ、敵は近い。

大通りから離れ、裏道を抜け、竹林の中へと消えていく。敵も、それに続く。

だが、途中で紅の姿が見えなくなった。気配も感じない。

「くそっ、どこへ行った・・・」

…ザシュッ!!

「な、何っ!？」

突然聞こえてきた血飛沫^{ちしぶき}。それは、次々と重なっていく。悲鳴と共に。

「なんなんだっ・・・オイッ!返事をし」

「無駄だ」

「ひいっ!」

何の音も無く、首に刃が当たるのが判った。

傍にいと判っているのに、気配全く感じない。まるで幽霊のようだった。

「お前達に命令した者の名を言え」

「ふ、ふうりっ・・・ゴフッ!」

「!？」

男は汚物を吐き、苦しみ始めた。

危険だと判断し、紅は即座に男から距離を取る。そして、男はそのまま汚物を吐き続け、終いには倒れてしまった。

顔色が悪く、頬が扱けている。悲惨なものだ。

(今のは・・・恐らく薬だな。でも、一体誰が・・・?)

「ん・・・?」

ふと、すでに息絶えた男の首に何かが刺さっている事に気がついた。

近付き、刺さっているものを抜き取る。針だ。先端には、血ともう一つ、透明な液が付いている。

「これは…毒か」

毒だとすれば、いつ刺したのだろうか？

周りに他の気配が無いかと、神経を研ぎ澄ますが、何も感じない。もう逃げたか。もしくは、気配を感じないほどの達人か。どちらかだろう。ここにもても無駄だと思い、紅は針を回収して警戒しつつ、屋敷へと戻っていった。

「・・・まあまあだな。紅様とやらも、本気で殺り合ったら楽しそうだ」

紅が去った後、男に近付いた青年がいた。

口を歪ませ、青年は男の額に人差し指を置いた。そして、滑らせるように上目蓋まで指をもつてく。

「役立たずには、お仕置きだよね」

手に力を入れ、青年の指はほとんど上目蓋の皮膚を圧す。ある程度圧したところで、青年は親指を下目蓋へと置き、一揆に力を入れた。

グチャッ！

不気味な音と共に、男の眼球が、取れた。

青年は取った眼球を力強く手で、握り潰し、最後は足で踏み付ける。見ていて吐き気がするような光景だ。

「あゝ汚い。手も足も汚れたよ。だから、次のお仕置きだね」

息をしない男に向かって、一方的に話し続けながら、青年は笑顔でお仕置きを続けた。

* * * * *

竹林から離れた後紅は一族の屋敷に戻って武道場へと向かった。

明日への訓練だ。負ける訳には、いかない。

武道場に近づくにつれ、木刀の風を切る音が聞こえてきた。

誰かいるのだろう。そんなことは気にせず、紅は武道場の扉を開けた。

「咲斗・・・」

咲斗が、素振りをしていた。紅が来たと判って、すぐに止めたが、「紅様。どうかされましたか？」

相変わらず、感情の籠っていない声だ。

「少し、な。それより、咲斗がいるのは好都合だ。相手をしてくれ、勿論真剣でな」

返事が返ってくる前に、紅は武道場に置かれた木刀を持ち、構える。

「ですが、俺は」

「行くぞ」

言葉を遮り、紅は咲斗へと向かって、走る。反射的に、咲斗も木刀を構えて受けきった。

双方即座に距離を取り、再び紅が動く。と、次は咲斗も動いた。木刀と木刀がぶつかり合う。

「紅様、明日は鬼月の下へと行くのですよ？何故、こんな事を」

「・・・咲斗は、私の言葉を信じるか？」

力を緩める事は無かったが、紅は少し悲しそうな表情をした・・・気がした。

「俺は紅様に仕える身。何があろうと貴方を信じています。長を外れたとしても」

目を丸くし、紅は跳躍して距離をとった。

木刀を構えるのを止め、遠くを見るように紅は空を見つめる。武道場の窓から見える赤く染まった空を。その様子を見て、咲斗も構えを解いた。

「私は、まだ・・・誰とも結婚などしたく無い。一人の女として恋

をしたい。私が心から思った相手と」

夕日に照らされ、語る紅はいつも以上に美しく思えた。

「だから、私は負けられない」

こんな話をしてすまないと謝罪すると、紅は逃げるように武道場を後にした。恥ずかしかったようだ。

「心から思う相手・・・」

一人残された咲斗は呟いた。

心から思う相手を思い出しながら。

今日の夕日はいつも以上に眩しい。

第貳話

「いつてらっしゃいませ、紅様」

一族の見送りで、紅と咲斗は風臨鬼月の下へと向かっていた。
今日の紅の服装はいつもとは違う。

紅は花柄のちゃんとした女ものの着物を着、薄く化粧をしている。美形の為に、無理に化粧をすると逆におかしくなってしまう。だが、少し化粧をするだけでいつもとは違う美しさが紅から感じられる。女としての美しさが。

「咲斗。やっぱり男物の着物では駄目か？かなり動きにくいんだが・・・」

紅にとっては男ものの着物の方がいいのだが。

「駄目です。それと、言葉使いも直してください」

「これは無理だ。それに、どうせ長と結婚すると分かれば拒否する奴などいないだろう。どんな奴であろうとな」

どこか、悲しそうな目をしている。自分自身を見てくれない、辛さ。どれだけ外見が凛々しく、強く見えても心は泣いている。自分を見て、と。

それからは無言。紅も咲斗も何も言わなかった。

鬼月の住む場所は、影乱一族の領地の隅。皆から避けられ、それが嫌になって隅で住むようになったと噂されている。恐らく、それは嘘で、追い出したが近いと思うが。

影乱一族の・・・紅の住む一族の屋敷は領地の中心部に近い辺りで、鬼月の住む場所からは少し離れている。だからと言って歩いていけない距離では無い為に、紅と咲斗は徒歩で向かっているという訳だ。

日が高い。もうすぐ昼だ。

だが、紅達が鬼月の住む場所へと到着していない。というか、家

すら見当たらない。あるのは木、木、木。

「・・・鬼月の家はどこだ？咲斗、お前手紙を送っただろう？」

咲斗の方を見たが、目を逸らしている。わざと遠くを見つめているのだ。

「送ってないのか？」

「送れなかったが正しいです。狼影^{ろうえい}を使いには回しましたが・・・見つかりませんでしたから」

狼影。影乱一族で戦闘用、もしくは通達用の獣として飼われている狼。一族専用、特に位が高い者の狼影は幼い時から毒を飲まされ、牙に毒が染み込むようになっていく。その所為で殆どは死ぬが、生き残った狼影は位の高い者の戦闘用、通達用の狼影となる。

だが、紅はそれを拒み、将来自分の狼影となる狼は自分で育て上げた。勿論、毒など飲まさない。そのおかげか、紅に忠実な狼影となった。現在は一族の屋敷で待機中。

「・・・まあ、影乱一族の領地にいるのなら、見つかるだろう」

「ほぼ、自己暗示ですね」

「お前が言うな」

ため息をつき、紅は辺りを見渡した。やはり、木、木、木…。家らしきものは見当たらない。

（いっそ、このまま・・・見つからなければいい）
と、思った刹那…

…ザザッ！！

背後から獣のように、現れた。

気配に反応して紅は腰に手を回したが、今は刀を持っていない。代わりに、咲斗が刀を抜いて現れた人物に刀を振るう。

刃と刃が交じり合う音が響く。そこで、やっと紅と咲斗は現れた人物を見ることができた。

ボサボサの髪を無造作に結われた茶髪。顔と体格から見て、歳は

紅と同じか、それ以上の青年。

着ている着物は普通の着物より丈が短く、少し破れているところもある。恐らく、よく着ているのだろう。腰には刀の鞘があり、それだけよく手入れされていた。

ここまで見ても、不思議すぎるぐらいなのだが・・・さらに不思議なことがあった。

それは、目が紅色に“光っている”ということ。

紅のように目が赤い訳では無く、紅色に光っている。普通の人間ではありえない。鬼の血を引いた影乱一族の者でさえ、目が光るものなどいないのだから。

「お前等・・・誰？」

獣のような目付きで咲斗に問いかける。

「影乱一族の者だ。刀を鞘に納めろ」

「証拠は？」

「証拠、だと？」

眉間に皺を寄せ、咲斗は青年を強く睨む。どうやって証拠を出せというのだろうか？と問うように。

「オレは、知っている。いつも俺を狙って嘘つく奴等がいるっ・・・！」

大きく宙返りをし、距離を取る。青年はまた刀を構えて咲斗の方へ走った。

速い。一番初めに襲い掛かってきた時よりも。

だが、咲斗は負けない。すぐに構えをつくり、青年の攻撃を受ける。次は刀を交えている時間は短く、すぐに咲斗が距離を取った。

切っ先を青年に向け、腹を狙って、突く。それを青年は刀で受け流し、懐ふところに入って、狙う。咲斗は避けようとつさに地面を蹴り、薙ぎ払った。

危ないと感じ、青年は跳躍をして距離を取る。じりじりと移動するだけで、双方動かなかった。

そして、先に仕掛けてきたのは青年。地面を蹴って、跳躍するの

と同じようにバネにして走る。咲斗も動き出し、青年に向かって刀を振り下ろした。

…ザシユツ！

咲斗は右頬に。青年は左頬に切り傷が出来た。浅い、切り傷。再び切りかかろうと、青年は動き出そうとした。が、

「もう、止める」

「ッ！」

首に、刀の刃が添えられた。逃げることは不可能に近い。可能性があったとしても、絶対に致命傷は負うだろう。

「紅様……」

「私の名は影乱紅。で、さっき戦ったのが影乱咲斗。すまないな、無礼を許してくれ」

刀を納め、紅は青年を見やる。まだ、目は光っていた。

（コイツの目は……なんなんだ……）

少し、不気味に思った。まるで、全てを見透かされてるみたいで。

「……お前……いい奴だなっ！」

「！？」

突然青年は紅に抱きついた。満面の笑みで、だ。

「な、何をする！？」

さすがに動揺している。生きていて恋というものを体験していない紅なら、なお更だ。それでも、青年は構わずに抱きついている。まるで、犬。

「オレのこと心配してくれるっ。いい奴っ」

「何故そうなるっ。私はただ、無駄な争いが嫌いなだけで決して」「手を離せ」

紅の言葉を遮り、咲斗が青年に刀を突きつけている。相当、怒っているのだろう。背後に、鬼の面が見えてもおかしくは無い。

「……コイツ嫌いだ」

「ああ、俺もアンタが嫌いだな」

鬼のように怒っている咲斗と不機嫌な青年。二人の間で火花が散っている。まあ、紅はその間にいる訳なのだが。

「あー・・・とにかくっ。咲斗は刀を納めて、お前は離れろっ」

渋々ながらも咲斗が刀を納めたことを確認して、紅は青年を引き剥がした。

その時に、紅が見た目の色は・・・漆黒の黒だった。

(黒・・・?)

疑問に思いつつも、一番の目的を早く達成する為にすぐさま考えるのを止める。

「それで、お前の名は？」

「風臨鬼月」

なんの躊躇も無く、青年、鬼月は言い切った。自分が何に選ばれたのか知らないまま。

呆然と立ち尽くす紅と咲斗。それに比べて、鬼月は首を傾げているだけ。さらに、犬に見える。

「っっっ。こんな所で会うとはな・・・。咲斗、刀を頼む」

無言で、咲斗は紅の刀を取り出した。普通とは違う、よく手入れされている刀だ。

刀を受け取ると、紅は一旦髪を解き、もう一度結い直した。いつもと同じ、結い方に。着物は動きやすいように一部を切った。

少し、男を誘惑しているようにも見えない事もないようなあるような・・・。

「何してるんだ？」

「・・・。鬼月。私は影乱一族の現長だ。そして、私は二日後に十六となる。よって、私より強い者と結婚しなくてはならない。その者の候補として、鬼月。お前が選ばれた。さあ、私と決闘しろ」

刀の切っ先を鬼月に向けた。

ここまで言えば、もう逃げられない。長と分かれば、誰だって紅の結婚を申し込む。なのに、それを紅自身が頼んでいるようなもの

だ。断る者などいる訳が・・・

「ヤダ」

いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「オレは、紅のこと知らないし・・・紅は、オレのこと好きじゃないじゃん。それに、一族の決まりに従うことが、紅は嬉しいの？」

鬼月の言葉で、紅は気付いた。

彼は、“自分自身を見てくれている”という事に。

（不思議だ・・・。鬼月は、影乱一族に追い出された身だと言うに・・・どうしてここまで私に優しいのだろうか？）

自然と、小さく笑みが零れた。おかしいからとか、そんなんじや無い。ただ、自然と零れてきた笑みだ。

「風臨鬼月。紅様には敬語で話せ。お前も影乱の土地にいるのだから、それぐらいは常識だ」

「えゝ。なんで？紅は、紅だよ。敬語とか面倒くさいし、いいじゃん」

「大体、お前は・・・」

いつの間にか、咲斗と鬼月の言い合いが始まっている。その光景は、どこか温かいものだ。

こうしていると・・・昔を思い出す。

刀を鞘に納め、紅は目を閉じて昔を思い出した。幸せだった、頃の昔。

初めて咲斗と咲夜に会ったのは、紅の父、影乱刀誠えいらんとうせいの紹介があったから。まだ、五歳になったばかりの時だ。

「紅。この子達は今日から紅と遊んでくれる子達だよ。自己紹介をしなさい」

「は、はい。影乱・・・紅です。よろしくお願いします」

当時、（今からは想像できない）紅はかなりの引っ込み思案だった。

一族の屋敷から出る事は殆ど無く、同年代と接することは無い。いつも、周りの大人達がやってくれる。自分でやると言っても、全て「次期長にこんな事をさせられない」と言って、断られてしまったが。だから、咲斗と咲夜との出会いは紅にとっていい機会だった。将来、長として相応しい子になれる。一族の者の前で堂々としている長に。

「ほら、お前達も自己紹介をしなさい」

「影乱咲斗。よろしくお願いします、紅様っ」

今からは絶対に想像できない（出来たらすごい）、ほどの満面の笑み。可愛らしく、子供らしい。

「影乱咲夜。よろしくな、紅様」

「こらっ！何て口の利き方をしているんだっ！咲斗を見習いなさい、咲夜っ」

咲夜は、咲斗とは対照的。大人しそう？ な咲斗に比べ、咲夜はかなり行動的。決めた事はやり通す。それが、咲夜だ。

「んじゃ、早速。咲斗、紅っ！遊びに行こうぜっ」

笑顔で、紅と咲斗の手を取り、走り出す。

「コラッ！！！咲夜っ！！」

叱られているのは無視して、咲夜は強引に連れ出して行った。

「に、兄さんっ。後で怒られるよ」

不安そうな顔で咲斗は咲夜を心配している。絶対に将来、咲斗の方がしっかりした人物になると紅はこの時思った。

「いいんだって。何とかなるしっ。・・・ん？どうかしたか？紅」

少し戸惑いと不安が混ざった表情をしている紅に、咲夜は明るく声をかける。もう、敬語は完全についでいない。

「えと・・・その・・・何か、こういうの初めてで・・・どうしたらいいのか分かんなくて」

「楽しめばいいんだって！紅のしたい事をすればいいし、言いたい事を言えばいい。俺達はお前の遊び相手なんかじゃないっ。友達だ

からなっ」

不思議な気分だった。心がフワフワする感覚。そう、楽しい。咲斗と咲夜がいることが・・・楽しい。初めて心から笑った気がした。「く、紅様っ。ボクも・・・ボクも紅様の友達ですよ」

「おー！我が弟ながらよく言った！偉いぞ」

ぐしゃぐしゃにするように、咲斗の髪を掻き回す。抵抗はしているものの、それは殆ど無意味。咲夜にされるがままと言う状態となっている。

「プッ・・・アハハッ」

「紅さまあ、笑つてないで助けてくださいよぉ」

半分涙目で助けを求める咲斗。

「コラッ。男のくせに助けを求めるなつての」

「ううゝ・・・」

初めて出来た友達。“自分自身”を見てくれる人達。

駒で遊んだ。おいかけつをした。山を探検をした。それから・・・数え切れない小さな思い出と、続く事の無い短い幸せ。

願うならば、またこの幸せが・・・

目を開き、紅は決心したように咲斗と鬼月を見やる。その視線に気づき、双方口を閉じた。

「鬼月。咲斗。私は・・・一族と話をつけようと思う。その為に、鬼月。お前は屋敷に来てほしい」

黙って聞いている事を一度確認し、紅はもう一度口を開く。

「影乱の領地にいる町人に私が長だという事を明かす。それと、鬼月を受け入れてもらう」

* * * * *

現在、紅、咲斗、鬼月は影乱一族の屋敷にいる。

昨夜。鬼月を連れた紅と咲斗が戻り、緊急に一族の会議が開かれた。

鬼月もその会議に出席している。と、言っても紅に喋るなどいわれ、今のところ殆ど口を開いてはいないが。

「裏切り者の子供・・・」「紅様が負けたのか?」「嫌。勝ったから、ここで裁くつもりでは?」「そうだといいがなあ」「紅様の實力を疑っているのか?」「きっと、裁きを下すさ」「裏切り者としての裁きを・・・」

やはり。鬼月は影乱一族に受け入れられていない。それなのに、鬼月は何も言わない。ただ、真っ直ぐと見ているだけ。

喋るなど言われても、堂々と自分の悪口を言われたら、何か言うものだろう。

(・・・何を、思っているんだろうな)

感情の読み取れない表情。会った時の警戒や、懐いた時の笑顔などでは無い。感情を隠した無表情。

憎しみや憎悪がある訳では無い。ただ、見ているだけの無表情だ。

「・・・静まれ」

そろそろ話をしなくてはいけないと思い、紅は一族の者を黙らせた。

全員、紅に視線が行く。鬼月を除いて、だ。相変わらず、真っ直ぐとどこかを見つめている。

「皆、よく聞け」

一言間を置き、再び口を開く。

「鬼月を影乱の屋敷に留まらせる」

「!?!」

殆どの者が目を丸くした。

当たり前だ。裏切り者と言われ続けている者を、影乱一族の屋敷に入れるという事は・・・普通は無い。これは、他の一族でも同じだろう。

「反論は認めない。これは、私からの命令だ」

いつもならば、ここで咲斗が何か反論するところだが・・・隣にいる咲斗は何も言わない。受け入れている。

「鬼月。何か言いたい事はあるか？」

「・・・俺は、物心つく前から一人だった。何か村で育てられてたけど・・・ずっと倉の中で、いつも食べ物しか持つてきてくれない。余ったものとか腐ったもの。無理矢理口に入れて食べた。生きるために。だけど、村から追い出された。それから森で暮らして・・・ずっと一人だった」

これは、きつと辛い過去。鬼月にとっての辛い過去。なのに・・・鬼月は変わらず無表情。

寂しそう？ 悲しそう？ 苦しそう？ それは全て違う。ただの無表情だ。

「裏切り者だから仕方無い・・・。一回だけそう言われた」

鬼月の拳に力が入った。

無表情から一変。一族の者を睨み付ける。恐ろしいほどの、殺気を纏って。

そして、拳で畳を叩き付けた。

「俺は母さんでも父さんでも無ねえっ！同じにすんな！影乱一族を裏切った覚えは無いんだよ！それだけで決めんじゃねってんだ！！」

言い切った後。鬼月は満足したように笑顔になった。

そんな鬼月の様子を見て、紅も小さく微笑む。

「そういう事だ。これで、良いだろう。人は同じでは無いのだ」

「・・・紅様。それは、良きとしましょう。それで、鬼月と結婚の件はどうなったのですかな？」

義時が興味深げに聞いてきた。

「ああ、その件は破棄^{はき}だ。そうだな・・・明日の朝。村の広場に集まれ。そこで、理由を話そう」

「何故、村の広場なのですか？」

一族の一人が口を開いた。当然の疑問を、だ。
「それは、明日のお楽しみだ。それでは、解散する。夜中に起こしてすまなかったな」

会議は終わり、紅は鬼月を連れて出て行った。

（明日が楽しみだ・・・）

体の奥の方に感じる感情。

それを、紅は出さぬように早く眠ろうと思った。

第参話

深夜。紅の私室に咲斗と鬼月がいた。

紅と咲斗は普通に起きているが、鬼月は虚ろな目で眠そうにしている。

寝たい時に寝る。まるで獣。それが、鬼月らしいと言えば、らしいのだが。

「明日。どうするのですか？」

「勿論、私が長だと言う事を明かす。鬼月の事も、な。だから、咲斗に明日は村にいる人々を集めてほしい。頼めるか？」

「はい」

「有難う。今日は・・・ここで、鬼月を寝かせよう。私は隣の部屋で眠る」

すでに鬼月は夢の中。寝息をたてて眠っている。

（本当に不思議な男だな・・・）

鬼月に聞きたいことは多くある。だが、今はそれよりも・・・自分の気持ちに素直になりたい。

小さく笑みを浮かべて、紅はすぐさま私室を後にした。

* * * * *

朝がやってきた。

日が昇る頃にはすでに咲斗は目覚めていた。村の至るところに紙を貼り、広場に集まるよう呼びかけている。紙だけで集まるかどうかは判らない為、歩いている人物や巡回中の役人などにも声をかけている。

午前七時～午前九時
今日の辰の刻。長の言葉がある、と。

紅が長になってから長として表に出る事は初めての事で、恐らく殆どの者がやってくるのだらう。大体の者達は長に感謝の心を示

している。

普通、一族以外の者・・・一般人は一族達の領地に無断で入る事は許されない。敵と見なされ、殺される。どこの一族でも大よそはそうだ。だから、一族達は不平等な交渉をし、一族の領地で暮らしている者もいる。だが、影乱一族は違う。検査はするものの、疑いが無ければ普通に暮らして良い。それは、影乱一族だからこそ出来ることであり、長の優しさだ。最強と言われていても、心まで冷め切っている訳では無い。ただ、力を持って産まれただけ。他とは違う・・・力を。

一通り呼びかかけたところで、咲斗はある場所へと向かった。大切な場所であり、苦しみの場所でもある。そう・・・兄、咲夜の墓だ。

影乱咲夜と刻まれた墓石の前で、咲斗は手を合わせる。ここに、咲夜の骨は無い。それでも、手を合わせる。

咲夜が死んだ事は確定していない。咲夜は突然消えてしまったのだから。前触れなど無く、突然と。理由は誰にも判らない。いつか帰って来ると思っていたが、帰って来ることは無かった。もう、五年以上経っている。

「・・・しばらく来ないですみません。補佐の仕事をしていたので・・・」

いつも淡々とした声なのだが・・・今日は違う。咲斗の声には、感情が籠っていた。悲しみの感情が。

「兄上は生きていますか？ それとも死んでしまったのですか？」

問いに答える者はいない。ただ、風が咲斗の髪を揺らす。

「生きているのなら・・・戻ってきてください。紅様も待っているですよ。勿論、俺も・・・。俺は、これから仕事があるので失礼します」

一礼し、咲斗はさっさとその場を後にする。

影乱一族の屋敷。紅の私室前。咲斗は見張り役として、そこにいた。紅に頼まれたのだ。

紅の部屋に侵入をさせないように。ただ、黙ってそこにいるだけ。それだけで、殆どの者を寄せ付けない。咲斗の忠実さと、殺気が重なれば誰もが後ずさりをする・・・と噂されていたりする。実際のところは不明だ。

だが、実力があることは事実。一族の中で、唯一紅と同等に戦える者。

「咲斗。そこに誰もいないか？」

襖障子の内側から、聞こえてきた声。紅の声だ。

「はい。誰もいま・・・誰だ」

言葉の途中で、気配に気が付いた。

微かではあるが、確実に気配がする。咲斗は刀の柄に手を添えた。

「・・・気付いた、か」

聞こえたのは男の声。何故か、咲斗は自然的に兄の咲夜の顔が思い浮かんだ。

「さすが、俺の——」

最後の方は全く聞き取れなかった。

そのまま気配が引くのが判り、咲斗は手を刀の柄から外す。本当はもっと警戒をすべきなのだが、自然と手が外れた。

「さっきのは、誰だ」

「判りません。ただ、殺しに来た訳ではなさそうです」

（何故そう思う・・・？）

自分で言ったことだが、不思議に思う。理由を問われたらどうしようかと悩んでいたが、

「そうか」

何も聞かれなかった。

だが、恐らく、紅は何かに気が付いてはいるだろう。その上で言わない。紅なりの心遣い。問えば、きっと返答に詰まると判っているのだ。

「それでは、そろそろ行こう。皆が待っているはずだ」
襖障子を開け、紅が出てきた。いつもとは違う紅が。

* * * * *

村の広場は人で溢れていた。

その中には、影乱一族の者も混じっている。ざわざわと騒いでいたが、咲斗がやって来て、少し静かになった。と言っても、まだ完全には無いが。

「よく集まった。今から、影乱一族の長。影乱紅様が皆に言う事がある。心して聞け」

咲斗の声と言葉でいいんと場が静まり返る。

そして、紅が現れた。

ゆつくりと、紅の姿が皆の視界に入っていた。その姿に、皆が目丸くする。

髪はいつものように結っておらず、椿の髪飾りをつけており、薄く化粧をしていた。鬼月に会いに行った時とは違う。さらに気合を入れている・・・ように見える。

着物は黒い生地に椿の花が咲く大人びていて、いつもの紅には見えない。立派な女性と言った方が正しいだろう。とても、美しい。

「私の名は影乱紅。影乱一族の現長。皆、よく聞いてほしい。私は、見ての通り女。こんな私が長をしている事はおかしいと思うだろう。一族の者からは明かさぬ方が良いと言われた・・・。」

だが、私は今ここに。私が長である事を皆に知ってもらいたい。たとえ女だとしても・・・私が長だと認めてほしい」

誰一人口を開かなかった。

それでも、紅はそれと、と話を続ける。

「風臨鬼月。鬼月の名は知っているだろう。私は、鬼月に言われた。『自分の望んでいる事をするのでは無いか』、と。その通りだ。私は一族の者達に全てを決められるのは嫌だ。長という地位も仕事も

結婚も。自分で決める。だから・・・鬼月との結婚とも断つたし、鬼月を受け入れると決めた。聞こえているだろう？ 影乱一族の者達よ。これが理由だ。お前達が私を長だと認めなくとも、私は長だ。誰が何と言おうとも、譲る気など無いっ」

沈黙。

紅の事を長として受け入れるのは難しい事だと紅自身も判っていた。同意しないのも当たり前だろう。それでも・・・やはり、自分で決めた道だから。譲れない。

しばらく沈黙が続いた時だった。

「わ、私は・・・賛成します」

不意に、一人の声が聞こえた。沈黙だったお陰で、よく聞こえる。「ずっと、紅様がこの領地を安定させてくれて・・・それで、平和に過ごせて・・・。私は、紅様を長として認めますっ」

一人の一般人の言葉で、他の者も反応を見せた。

「確かにそうだよな・・・」「紅様のお陰よね！」「紅兄ちゃんじゃなくて姉ちゃんだったんだな！」「女の人で長なんてすっごーい」

「長は紅様で決まりよっ」「紅様にしか今の長はいない！」「紅様が長だっ！」

賛成の声が沸きあがる。

反論の声があったとしても、賛成の声で掻き消されてしまう事だろう。

（良かった・・・）

自分の事。鬼月の事を受け入れてもらえた。

安堵し、紅は一人静かに村の広場を後にした。

「・・・紅、ねえ。ふふっ、楽しい」

その背後に誰かが跡をつけているとは知らずに。

村の広場を後にした紅は、鬼月のいる自分の私室へと向かった。
た。

襖障子を開き、鬼月の様子を確認する。

今朝、勝手にうろつかない様に朝食に睡眠剤を混ぜておいた。眠っている・・・はずだ。

案の定。鬼月は眠っていた。それにホッとし、起こそうと手を伸ばすと…

ぐいつ

突然腕を掴まれ、鬼月の方へと引き寄せられた。

「起きていたのか？」

あまり動揺は見せずに、紅は問う。だが、鬼月の表情は警戒心を剥き出しにした獣。返答が帰って来るとは思えなかった。

「静かに。・・・そこにいるの、誰？」

鬼月は開いた襖障子から見える庭の木を睨み付ける。

紅は気配を感じておらず、どこにいるのか判らなかった。つけら

れていたと言う事も。

「気配・・・消したつもりだったんだけどなあ」

「気配じゃなくて匂いだけだ」

木の後ろから、十三歳前後だと思われる少女が出てきた。

髪を高い位置で二つ結びにし、リボンがつけてある頭。顔は童顔で、リボンと合わせて幼く見える。

服は短丈の着物。桜が刺繍されていて、とても可愛いものだった。紅が絶対に着ないタイプだ。

そして、少女の背には二本の大きな槍があった。少女の背以上はある。

「子供・・・？」

「始めまして、影乱の長さん。あたしは、桜って言つの。よろしくねえ」

人懐っこい笑みを浮かべて、少女、桜はゆっくりと歩み寄る。だが、その行動を鬼月は許さない。武器を持つ者に、容赦はできないのだから。

「そこで止まれ。これ以上近付けばオレはお前を敵と認識する。容赦はしない」

冷たい声で言うと、鬼月の目が赤く光り始めた。

その目を見て、少女は足を止める。言葉では無く、目を見て。

(あの時と・・・同じ目)

咲斗と戦った時と同じ目。赤く光る目。

「その目・・・ふうん、そっかあ」

興味深げに言うと、桜の姿が忽然と消えた。

どこに行ったのかと紅は辺りを即座に見回したが、どこにも姿は無い。一体どこへ？

探している…刹那

…ギンツ！！！！

「っ!？」

刃と刃の交じり合う音。

すぐに視線を向けると、そこには二本の槍を振り下ろした桜と、その槍を受け止めている鬼月の姿が。

「うん。反応合格」

すぐに桜は跳躍し、鬼月から離れる。

ふわりと着地し、着物が揺れたかと思えばまた忽然と姿を消して、鬼月の頭上に現れた。

そのまま、真っ直ぐ鬼月の頭に向かって突き刺す。鬼月は紅の腕を引っ張って、避ける。紅にも当たらないようにしているのだ。

ドスッ、と言う鈍い音と同時に、畳に穴が空いた。深い穴だ。

だが、桜はすぐに槍を引き抜く。まだ子供だと言うのに、どんな力を体に秘めているのだろうか？

それから、桜は只ひたすら鬼月に向かって槍を突くだけだった。

鬼月の方は紅を守りながら避けているため、明らかに不利だ。それでも、桜は容赦しない。

避けてはいるものの、今日は女ものの着物を着ている為に刀を持つていない。完全に紅は足手纏いとなっている。

小さく呟き、紅は鬼月の刀に手を伸ばし、抜いた。

「借りるぞっ」

そのまま紅は驚く鬼月の腹を蹴り、勢いを付けて桜に迫る。蹴られた鬼月は後ろに飛ばされたのだが、それを全く気にせず、紅はそのまま桜に向かって刀を振り下ろす。

紅がやってくるとは思わなかったようで、少し怯んでいた。その怯みで、桜は押される。二本の槍を使って、やっと耐えているという感じた。

さらに、紅は力を入れ、桜を私室の壁に叩き付けた。耐えられなかったのだらう。

痛みに表情を歪ませながら、桜はよろよろと立ち上がる。

刀を桜の首に添え、睨む。あそこまで出来る少女だ。油断をしていたらやられてしまう。

「プッ……アハハハハハハハハハッ！ ハハハハハハハハハ
ッ！」

突然、桜は笑い始めた。嘲笑うかのような、笑いを。

「うん。どこもおかしくないよ。ただ、話に聞いてた通りで面白い人だなあ、て」

痛みはどこへ行ったのか？ 桜はまた、人懐っこい笑みを浮かべている。まるで、もう痛くないとも言つかのように。

32

「うん、秘密。言ったら、あたしが怒られちゃうから。それに」
言葉の途中で、桜が目の前から消えた。

（何！？）

一瞬の出来事で、紅はどこに行っただのか判らなかつた。

「今日は帰らなきゃいけないんだ。またね」

いつの間にか背後にいた桜。と言っても、目線を移した後すぐに、また消えてしまった。

掴みどころが無い。一体何の目的で桜はやってきたのか？

何故か、心のどこかで引かかる。

その引かかるものが判らないまま、紅は刀を倒れている鬼月に渡した。

* * * * *

「たっだいまあゝ」

紅の下・・・影乱一族の屋敷を後にした後、桜はある屋敷にいた。影乱一族の屋敷ほど広くは無いが、まああの広さ。ざっと家が三個分。その中で、一番大きな和室に桜はいる。他にも、数名の者がおり、その中で一人だけ少し段差がある場所に座っていた。

その段差がある場所に座っている青年が口を開く。

「おかえり、桜。紅はどうだった？」

「うん。とっても面白い人だったよお」

青年に向かって満面の笑みを浮かべ、桜は青年の上に座った。

そんな桜を嫌がる事無く、青年は逆に軽く頭を撫でる。それを、気持ち良さそうに桜は目を閉じた。

「そう・・・それは良かった」

微笑を浮かべる青年。だが、次の桜の一言で表情が一変。

「それとね、同族にも会ったよ」

「同族・・・？」

少し眉を寄せ、一瞬笑みが消えた。

だが、それは一瞬で、すぐに笑顔を作る。次は、不自然なぐらいに嬉しそうな笑顔。

「どんな人だった？」

「何か・・・他の人と違う感じ。それとね、輝月きげつに似てたんだよお」
無邪気に言った桜の言葉は、青年、輝月の表情をまた変えた。

次は、興味津々な顔だ。

「へえ・・・僕に」

「うん。何かねえ、見た目とかはあんまり似てないんだけど、雰囲気がちよつと似てたんだよ」

「ふうん。・・・それより、夜はどうしたんだい？一緒にいたよるただろ
う？」

話を逸らすかのように、コロリと話題を変える。それを不思議に思わず、桜は口を開く。さすが子供だと言っべきだろうか。

「夜。弟に会いに行くつて。どっか行っちゃった」

「弟、か。戦う事にならないといいねえ。多分、無意識に手加減しちゃうから」

楽しそうに、嬉しそうに、輝月は笑う。

「負けちゃうの？」

小さく首を傾げる桜。それに対して、輝月は肩を竦めた。

「負けないよ。偽者でも、多少は強いからね。普通の人間よりかは、
ね」

「でもさあ、偽者つて危ないんじゃないの？」

こんな感じに、と言つて桜は自分の首を斬るように、指で風を切る。

「大丈夫だよ・・・。そう簡単に負けないさ。敵にも、自分にも」
(負けてもらつては、ただの失敗作だしね)

上に乗っている桜を降ろし、輝月は立ち上がった。

「さてと・・・。そろそろ動き出そうか」

第肆話

影乱一族の領地の村人達が去っていく。

紅の話が終わり、一段落付いたところで、咲斗は村人達を解散させた。

残ったのは影乱一族の者達。呆然と、立ち尽くしている。笑っている善時以外は。

「・・・咲斗殿。これはどういう事ですか？ 何故、紅様は我等に何も言わず、長と言う事を明かしたのですか？」

影乱一族の一人が口を開いた。

「紅様が望んだ事。お前達がそれを拒む権利があるというのか？」
睨み付けるように、咲斗は口の開いた者の方を見る。

「それは・・・」

確かに、そんな権利などは存在しない。咲斗の言う事は正しい。
それでも反論の者が口を開こうとしたが、

「紅様の忠誠を誓う者ならば、紅様の望みを受け入れられるだろう。
私は少なくともそう思うがね、咲斗殿がそうであるように」

善時に遮られた。

次こそ、誰も口を開かなかった。何も言えない。

「それでは、我等も解散でしょう」

一族の者達は、何も言えずに、影乱一族の屋敷へと戻っていった。
未だに残っているのは咲斗と義時。互いに話したい事があるのだろう。睨み合う様に、向かい合っている。

「義時殿。貴方はここまで考えていたのか？」

「はて？ 何の事やら。私はただ、紅様の為を一番に考えているのですから」

誤魔化す様に、義時は曖昧に笑う。

だが、咲斗は引き下がる事無く、眉間に皺を寄せる。

「貴方には感謝している。だが、アイツ・・・鬼月の目はなんだ。」

赤く光る目など、聞いた事が無い。貴方は何故、鬼月を候補に出した？」

初めて会った時（と言ってもそんなに時間は経っていないが。）の鬼月の目。赤く光っていた。

それを、義時が知らなかったとしても、鬼月を候補に上げるのはおかしい。必ずと言ってもいい。一族の者達が反対する事は目に見えていたはずだ。実際、一族の者達は反対した。

なのに・・・何故、鬼月を選んだ？

鬼月に拘る理由があつたのか？

「そんな事。咲斗殿が気にする必要など無いのですよ。それに、赤く光る目など私も始めて聞きましたからねえ」

笑顔を崩さないで肩を竦める義時。

（何か、知っているな・・・）

「では、私はこの辺で・・・咲斗殿。忠誠の刃は、時に己の守りたいものまで傷つけるものですから、気をつけなされ」

機嫌良さげに、義時は去って行った。

義時の言っていた通り、咲斗は紅に忠誠を誓っている。

裏切り者と呼ばれている鬼月が結婚の候補となれば、忠誠を誓っている者として心配するだろう。普通の者ならば。

だが、咲斗は少し別だ。別の感情で心配している。まあ、忠誠がある事は確かのだが。

（忠誠の刃、か）

『咲斗。忠誠って言うのはな、鎖なんだ。時に自分の守りたいものを傷つけるんだっ。兄からの言葉だ、覚えとけよっ』

まだ、紅と出会っていない時の、咲夜の言葉。

「・・・馬鹿らしい」

影乱一族の戦いを挑む無謀な一族は数えるほどしかない。いたとしても、すぐに部下達が殺る。俺が手を下すまでも無い。ただ・

一族の者が勝手に行動するのを裁く場合を除いて。
領地というのは、一族によって広さが違う。影乱一族はその強さがあって、領地は広い。

奪い合い、嫌。殺し合いで領地を奪ったり奪われたりする。影乱一族は、領地の奪い合いで圧勝。紅が長となつてから領地の奪い合いには参加しなくなったが、長の了解を無しに領地を奪いに行こうとする者がいたりする。その者達を止めるのが咲斗の仕事の一つ。時には殺さなくてはならない。仲が良くても、だ。

その所為で、咲斗は冷血な番犬と呼ばれる事もある。

長の命に忠実に従い、それをこなす。まるで忠誠を誓った番犬のよう。

その忠誠は、番犬の牙。咲斗にとつての鎖でもあるのかもしれない。長を守る為ならば、命を惜しむ事は無い。忠誠と言う名の刃がついた鎖。

「馬鹿らしい・・・」

もう一度同じ言葉を呟き、影乱一族の屋敷の戻ろうと足を進ませた、刹那

「そう焦るなよ、咲斗。まだ時間はあるだろ？」

背後から誰かに肩を掴まれた。

反射的に咲斗はそちらを見る。すぐに肩に乗っていた腕は振り払われた。

（なんだ・・・コイツは）

少し長めの髪を後ろで結った青年。歳は咲斗より少し上だろうか。少し背が高い。

服装は無地の着物。腰には刀が二本。特に目立ったところは見られないし、怪しそうにも見えない。

だが、人は見た目だけでは無い。気配に気付かなかったのだ。咲斗からすれば怪しすぎる。

「誰だ」

「そうだな……。紅様のところにいた奴、でいいか？」

子供っぽい笑顔を浮かべる青年。それが、咲斗は咲夜と重なって見えた。

昔、一緒に遊んでいた時に見せた笑顔に。

「名を名乗れ」

今は咲夜との思い出に浸っている時では無い。咲斗は眉間に皺を寄せて、青年を睨み付ける。

「そんな怖い顔すんなよ、咲斗。ただ、今はちよつと油断しすぎだな。紅様の補佐たるもの、いつでも警戒を解かずってね」

「何故そんな事まで知っている」

「大体の予想は付いているだろ？直感的に。まあ、それを認めよう
としない咲斗は随分と堅物になったもんだ。まあ、俺の名前は夜だ」
青年、夜は肩を竦め、突然咲斗の視界から消えた。動いたように
は、見えない。

「!？」

気付けば、また肩に手を乗せられている。変わらずの笑顔で。

「そんなに警戒すんなって。今日は挨拶だけだから。まあ、咲斗が
今すぐにでも戦いたいって言うなら別だけどな？」

一瞬、夜の目が淡い赤色に光った……。気がした。

まるで、鬼月と同じ。鬼月より薄い色だが、とても似ている。

でも、なぜか咲斗には違和感を感じた。

鬼月の目が赤く光っていた時、戦いに飢えた狂戦士のように思えた。不思議とそう思ったのだ。夜からも同じ感じがした。が、何故か、それは不安定な心を表しているようにも見えたのだ。

堕ちる直前のように。

「……余計な戦いは避けたい。だが、影乱の地にまた踏み込もう
と言つのなら、容赦はしない」

「怖いねえ、全く。昔と大違い。成長したもんだ。まあ、次に会う
時まで、また成長しているところを見せてくれよ？」

最後、口元を歪ませるように笑うと、夜は一瞬で消え去った。霧

のように。

一瞬追撃しようも思ったが、追いえる気がせず、咲斗は夜の追撃を諦めた。

（・・・夜、か）

「まさか、な・・・」

その場に残された咲斗は、眩くのだった。

* * * * *

影乱一族の屋敷。紅の私室・・・の隣の部屋に紅と鬼月はいた。突然現れた桜によつて一時戦闘が始まり、そして紅の私室は荒らされた。その所為で現在は隣の部屋にいるのだ。最も、隣の部屋も紅の私室と言っても良いのだが。

「紅、もうちょっと優しくやってほしかった」

畳の上に寝転がり、ごろごろと動く鬼月。

戦闘、紅は（仕方なく？）鬼月の腹を思いつきり蹴った。その為に鬼月は吹っ飛ばされ、壁に激突。プラス紅の蹴りと合わせて大ダメージ。と、言ってもタフな鬼月の為にそう大きな傷では無い。まあ、痛むだろうが。

「す、すまない。つい・・・」

申し訳無いと思っているのだろう。紅は正座して謝罪をしている。「それと、朝の睡眠薬不味かったよ」。せめて、もうちょっと苦く無いのが良かった」

「すまない・・・。と言うかやつぱり気付いていたのか」

大体は予想していたものの、気付かれていた。眠っていてくれたので良かったのだが。

「うん。匂いで」

「お前の嗅覚は獣並だな」

「そうなのか？紅とか片目も判らなかったのか!？」

真面目に驚いている。一人で過ごしていたのだから世間知らずな

のだろう。常識がおかしい。

「片目・・・咲斗の事か？別に何と呼んでも構わないが、その呼び方はあまり喜ばんと思うぞ」

最も、鬼月から普通に名前を呼ばれても喜ぶとは思えないが。と言うのは言葉にはしない。鬼月も咲斗も双方好んでいないように思えるからだ。実際そうなのだが。

「アイツ、苦手だ。堅物っ」

「判らないでも無いが、咲斗は真面目でいい奴だ。一族の為、私の為に良くやってくれている」

自然と笑みが零れた。

そんな紅に、鬼月はむっとした、子供っぽい表情になる。

「ねーねー」

むっとした表情のまま、鬼月は紅に抱きついた。

それを拒む事はせず、紅はそのままなんだ？と尋ねる。

誰かに抱きつかれるのは、嫌では無いのだろう。早くに親を亡くした紅ならば、なお更。温かさが感じられる行動なのだから。

「紅は、片目の事好き？」

沈黙。

好き？ 友として？ 仲間として？ 恋愛として？

どの選択肢に入るのだろうか？

少しの間悩んだ結果、

「ああ、そうなのかもしれない。仲間として、な」となる。

生きてこの方恋愛なんてした事無い。紅には恋愛としての好きという感情はよく判らなかつた。

だから、今が紅にとつての好きという答え。

「長として一番に認めてくれている。昔から一緒にいた仲間だ。私自身を受け入れ、存在を肯定してくれている。だから、私は長という地位に居続けられるんだろう。私としての存在があり続けられる」
「へえ・・・」

興味深げに言うと、鬼月はさらに、強く抱きしめた。
紅からすれば、正直苦しい。

「・・・オレは不安だ。自分という存在が、いつでも
え？」

紅には、聞き取れなかった。

あまりにも小さな声で、寂しそうに苦しそうに呟いた彼の言葉は、
聞こえなかった。

「なんでもない」

浮かべる笑顔は、どこか辛そうだった。

* * * * *

ある森の中。咲斗の前から去った後の夜がいた。

森の中で一番大きな木の上に乗っかり、足を垂らしている状態だ。
肩には鴉がいる。

「それで、輝月は何て？俺に何かさせる気だろ」

夜と鴉以外誰もいない。おかしい事だが、夜は鴉に喋りかけてい
る。普通ならば喋らない鴉に。

「察しが良くて助かりますわ。さすが、輝月様のお気に入り、でし
ょうか」

鴉は口を動かして喋り始めた。

それを驚く事無く、自然に夜は話しを続けた。

「別にお気に入りなんかじゃねえし。勘違いしない方がいいぜ？」

「あら、それは失礼しましたわ。では、改めて。『運命は動き出す。
直ちに戻って来い』との命令です」

あくまで敬語を使い、敬意を見せる鴉。

ただ忠実に命令をこなす人形のようにも思えた。

「・・・ふうん。運命、ねえ。俺達がやる事は全て天の導きとでも
言いてえのか？ ハッ、傑作だな」

嘲笑うように、仰ぐ夜。

それを見て、鴉は小さく笑みを零した。と、言っても鴉の為にあまり変化は見えないのだが。

「ふふつ。天の導きなどではありませんよ。私からすれば、輝月様が神同然……いえ、それ以上の存在であるように、輝月様の己の神がいるのですよ」

神という存在は人それぞれ違うとも言いたいのだろうか？

例えば、忠実な犬にとっては飼い主が神と言う存在になりゆるのだろうか？

神は皆が共通するものではない。見えないものを神と崇める人々。生きている生物を神と崇める人々。それと、神を信じない。己だけを信じる人々。

その中で、鴉は生きている生物……つまり、輝月を崇め、従う人形。全ては輝月の為に。己を犠牲にしても、輝月様の為に。

体を動かすのも、息をするのも、心臓を動かすもの、全ては己の神の為。

夜にとっては理解しがたい事ではあったが、鴉にとって大切な事というのは判る。

「神、ねえ……。じゃあ、アンタにとって輝月の神はアンタの何？」

「勿論、輝月様が崇めると命令すれば崇めますし、殺せと命令されれば殺します。私にとって、輝月様の神はただの輝月様の神でしかありませんから」

簡単にまとめれば、輝月以外関係無いと言う事なのだろう。

少し呆れ気味に、夜はそうか、と言った。

それでも、機嫌を損ねる訳では無く、鴉は

「はい」

と返事をする。

「つたく。輝月の下にいる奴等は全員変わりもんだな」

髪を無造作に掻き回し、夜は息を吐く。

「それは、貴方も含まれているのですか？ 夜様」

鴉の言葉で手が止まり、目を丸くして鴉を見やる。

漆黒の瞳が、夜を映し出していた。

「まあ、そうだな。だからこそ、真面目な奴がほしいと思うと時もある」

「そうですか。・・・少し、話過ぎましたね。私はこれで失礼します。夜様」

漆黒の翼を広げ、夜が何かを言う前に鴉は飛び去って行こうとした、が

…ザシュツ！！

キラリと何かが光り、その何かは鴉の右翼を切り落とした。

片方の翼が無くなり、飛べなくなった鴉は悲鳴を上げず、そのまま地へ。

助ける訳では無く、夜は落ちた鴉を冷たい目で見る。

「な・・・なぜ・・・です・・・」

苦しそうに、もがく。

「そりゃあ、もう用無しだからだよ、鴉。君はいらないんだ」

鴉に向かって言葉を吐いたのは、夜では無い。その傍に来ていた、翼を落とした張本人。

笑う狐の御面を被った、怪しげな人物。喋り方と体格からして、青年な事は間違いないだろう。

「誰・・・っですか・・・」

意識が朦朧とする中で、鴉は必死に翼を動かして起き上がろうとする。

だが、青年に残った左の翼を踏まれ、地面に這い蹲る形となった。「いつ！！」

「アハハッ。答える筋合いは無いね。それと、君には地面がお似合いだよ。嫌、枯葉かな？ 輝月の為に命を落とす枯葉の養分だからさあ、苦しみながら死んでよ」

青年は足に力を入れ、鴉の翼を地面に食い込ませていく。

悲鳴は上げないものの、鴉は苦しそうに見えた。少なくとも、夜には。

「ちよつとぐらい悲鳴を上げなよ。つまないじゃん。輝月の為だとも思つてさあつ」

一度足を上げ、そして降ろす。

さらに深く、翼は地面へと食い込む。

「輝月様はっ・・・そんな事・・・言わないっ」

「それはアンタの理想だよ」

木の上でただ見ていただけの夜が、口を開いた。

助けの言葉、では無く、冷たい言葉を。

「輝月は神なんかじゃ無い。ただの、鬼。人の仮面を被つた鬼だ」

「そ・・・んな・・・」

ある一族の領地にいた時に、全ての人間が殺された。

その中で、ただ一人生き残つたのが鴉。と、言つても昔は“人であつた”の다가。

そこで、輝月に拾われ、言われた。

『君はきつと、僕の傍にいられる人間だよ』

あの時の言葉は？

全て偽り？

自分が“人として”助けられた過去を思い出し、鴉は一筋の涙を流した。

己の神は、ただの鬼であつた事に。

「じゃあ、さようなら」

そんな事は、青年には全く関係無く、軽い口調で懷から取り出した小刀を突き立てる。

鴉が見た最後の景色には、狐の御面が怪しく笑っていた。

第伍話

序

鴉が、翼を広げた。

それは、黒く黒く、どこまでも黒い漆黒の翼。

翼を動かし、鴉は空へと飛んでいく。まるで、人が天に昇っていくかのように。

彼は、そう思った。

「どうしたの？ 輝月」

隣にいた桜が、小さく首を傾げた。

「…なんでも、無いよ」

彼は小さく笑った。

人の仮面の下に隠れた鬼の顔を見せた時だったのかもしれない。

鴉は一人ぼっち。

家族も親戚も友達も、皆殺されてしまいました。

誰が殺したのかは知りません。

だから鴉は手を取ってしまったのです。

人の仮面を被っているとは知らない、鬼の手を。

全てを知った時はもう遅い。

翼はもう無いのだから。

地に落ちた鴉は、それでも鬼を神だと思い続けるのです。

たとえ、利用されていると判っていても。

ずっと、

ずっと、

ずっと、

鴉は神を信じるのです。

序終

* * * * *

影乱一族の屋敷。紅の部屋。

もう、一週間ほど前の事。

紅は自分が長だという事を明かした。鬼月を村人達に認めてもらった。たった二つの事だったのに、紅はとても忙しく感じた日々であつた。

まず、自分が長だと明かした事について、一族の者達からの質問攻め。それが、五日ぐらい続いた。と、同時に鬼月についても質問攻め。これからどうするのだかと言う質問が多数だ。紅にとってはかなり辛い事。

昔から仕事をほったらかして村や町へ遊びに行っていた。

普通に仕事をする時は少なく、ほとんど遊びに行つて叱られる。初対面の人達に真面目そうと言われた事がある紅だが、全くそうでは無い。

その為に、一週間はかなりの労働生活だった。そして、鬼月にまだ、聞けていない。目が赤く光る理由を。忙しかったから、と言う理由もあつたが、少しだけ鬼月に避けられている気がした。今は元通りなのだが。その理由も、気になる。それと、桜についても話したい。ゆつくりと話をしたいのに、時間が無い。

現在は咲斗に言われ、山済みの書類や報告書などに目を通している最中。目の下にはくまを作っていたし、髪も結んでいない。

「はああ・・・」

正直、疲れた。

昨夜から書類、報告書、書類、報告書、書類、書類、書類、報告書、書類・・・死にそうだ。

それに、

「待てっ！鬼月っ！」

「うわっ！？ 片目！」

ドシャッ、ガシャン、などと何かが割れる音が響くようになった。鬼月と咲斗の追いかけてこ。

騒がしくなったけれど、紅にとってはこれは嬉しい事。とても温かく感じる事。自然と、笑みが零れる。

すると、

「紅っ！！！」

襖障子を思いっきり開ける音と、鬼月の声が重なった。

「また、咲斗に追いかけてられてるようだな、鬼月」

「そうなんだよっ！片目が勉強だとか言っておれの事を追いかけて回・・・うぎゃっ！」

鬼月につき、咲斗が紅の部屋にやって来た。

すぐさま鬼月の着物を掴み、一礼する。

「失礼しました、紅様。鬼月がお仕事の邪魔をして。すぐに連れて行きますから」

「嫌だああああっ！」

そのまま引きずるように鬼月を連れ、咲斗は出て行く。

助けて、と影乱一族の屋敷に声が響き渡ったのは、言うまでも無い事なのかもしれない。

また、紅は部屋に一人となった。

溜まった書類と報告書に目をやり、ため息をつく。まだこんなにもある、と。

しばらくボーツと見つめていた紅だが、ふと外の景色を見る。

景色と言ってもそれほど立派なものでは無い。大きな松の木と、

椿の花があるだけだ。そして、今は松の木の枝に、一匹の鷲がいた。真っ直ぐと、紅を見つめている。

（鷲・・・？ 影乱の屋敷に？）

鷲と言うのは、戦争中や敵襲などの伝達に使われるのが主だ。他には、同盟を結んだ一族同士の連絡などにも使われている。影乱の場合、あってもおかしくは無い事だ。最強とは言え、別に戦闘を好

んでいる訳では無いのだから。

何かあったのか？ と半信半疑で紅は鷺に近付いた。

「ピーッ」

「これは・・・」

鷺の足首に、紙が括り付けられている。手紙のようだ。

即座に手紙を取り、紅は鷺を放す。すると、鷺はピーッ、と鳴いて飛び去った。

ある程度見送った後、紅は手紙を開いた。

そこから、ほのかな森の香りだした。不思議な、森の香り。

影乱 紅様

紅、ほんましさしゅうなあ。堅苦しい事は苦手やねん。これで勘弁してな。

聞いたんやけどな？ 近々、紅結婚するんやて？ おめでとさん。

子供出来たら見せてーな。

せや、こんな余談は置いといてや。今回の用件はこんなんちゃうで？

ひょうな

こんなんで手紙出そー言うたら、氷那に止められるからなあ。

で、用件なんやけど、アレや・・・風臨一族の事や。最近怪しい動きしてるんやで？ 知つとたか？ まあ、一応やからあんまり気にせんといてーな。

最近な、不思議な事件が続いとんや。まあ、詳しくはそっち行つて話すわ。

気をつけーな？ ホンマやで？ マジやで？

んじゃ、また後日な。

すいめ ゆきの
水女雪野

水女一族からの手紙。しかも、長だ。

水女一族は、代々女だけの一族と言われている。遣伝子によって、子供は皆女しか産まれないとか。一般人や他の一族と結婚しても良く、そう言った厳しいルールが無い一族。戦闘は好まないと言われ

ていて、戦う事は殆ど無い。影乱一族とは、偶然知り合い、そして同盟を結んだ。紅と雪野は今、友人と言う関係。同じ長の立場にいる、良き友。

「不思議な、事件・・・？」

だから、友の手紙に書かれていた不思議な事件と言う言葉は気になる。

警告している。これから先、何かが起こるのかもしれない、気をつける、と。

一体、何が起こるというのか？

戦争？ 奪い合い？ 殺し合い？ それともその全て？

（嫌な感じだ・・・）

疲労を忘れ、紅は自分の中に湧き上がった感覚に、嫌な感じを覚えた。

まるで、自分が狙われているような・・・そんな感じだ。

「カアッ」

不意に、鴉が鳴く。

とつさに振り向いた時には、翼を広げ、飛び去る寸前だった。

翼をバタつかせ、鴉は紅の頭上を通って飛び去っていく。羽を、一枚落として。

* * * * *

「無理っ！こんなの判らないっ！」

机に置かれた本を投げ、鬼月は叫ぶ。

「勉強をしろっ。影乱一族に入ったのだから、ある程度の知識を持てっ！」

現在、書庫にて鬼教師咲斗と、生徒鬼月が勉強中。

正式に影乱一族に受け入れられた鬼月は、まず常識を知らない。

それは、影乱の恥だ。その為に、咲斗が教師として、鬼月に勉強を教えているのだが……。二人の相性は良い方とは言えない。

まず、鬼月は勉強は嫌だと言って、紅に助けを求める。それを、咲斗が良いと思うはず無く、そこで追いかけてここが始まる。さっきまでのもそうだ。

「イヤダッ。オレは勉強なんてしなくても生きていけた。大丈夫だっ」

「嫌でも、やれっ！」

同じ言葉の繰り返し。

決して勉強をしようとしないう鬼月もそうだが、勉強させようとする咲斗の根性もすごい。どちらも引き下がらず、逃げ出そうと、勉強をさせようとしている。諦めが悪い。

「堅物の片目っ！」

「堅物で結構だ。さつさと本の内容を暗記しろ。そうすれば、明日はテストをする。そのテストが終わったら次は」

「あー！！！嫌だ嫌だ嫌だっ！」

咲斗の言葉を遮り、鬼月は逃げ出した。

そして咲斗は鬼月を追いかける。本日何度目かの、追いかけてこ・・と、なるはずだったのだが、

…ドサッ！

鬼月と誰かが、衝突した。

双方尻餅を付き、すぐにやって来た咲斗は目を丸くする。

「アイタタタ・・・。影乱一族の屋敷が、賑やかになっとなあ」

頭を摩りながら、鬼月と衝突した女性は立ち上がり、鬼月に手を差し出した。紅と同じ歳ぐらいだろうか。

短めの金髪に、淡い色にも関わらず、深い海色の目。水、が合っているのだろうか。彼女の雰囲気は、一言でまとめれば水。透き通った水のように掴みどころが無く、色が見えない。何を考えているのか、判らない。流れる透き通った水が、目の前にあるようだった。服装は小花が散らされた水色の着物。腰には、刀が下げられてい

る。恐らく護身用だろう。

顔と、目の色。そして、着物から見て、影乱一族の者では無い。他の一族だ。しかも、今自由に影乱一族の屋敷を歩いているとなると・・・高い地位、もしくは長なのだろう。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとう・・・」

女性の手を取り、鬼月は立ち上がった。

「影乱の新入りか？ 見へん顔やなあ」

「ゆ、雪野様っ！ 何故貴方がここにいますか！？」

少しの間、呆然としていた咲斗が口を開いた。

「おお、咲斗！ 久しゅうなあ」

女性、雪野は笑顔で咲斗の両肩を軽く叩く。

まるで、友達とコミニケーションを取るかのように。一方で、咲斗は顔を青くし、硬直している。

何故咲斗がそんな反応をするか判らず、鬼月は無意識に首を傾げた。

「せや、紅はどこにおるん？ わっちの鷲が来とったはず何やけど」

「紅様は私室・・・のはずです。雪野様。いつ、鷲を飛ばしましたか？」

変わらず、咲斗の顔が青い。

「昨日」

「出発したのは？」

「三日前」

ため息をつかずにはいられない。咲斗は大きくため息をついた。

まず、同盟を結んだ一族同士でも、先に連絡を送り、他の一族の領地に入るのがごく普通のマナーで、常識。だが、雪野は別だ。常に、出発した後に連絡が来る。そのお陰で影乱一族は出迎えの準備をしていたのと騒ぐ。と、言っても追いつ返す訳にはいかない為に、そのまま屋敷へ上げ、その後で慌ただしく準備となる。これは、何度言っても直らない。咲斗も、これまで何度も雪野に注意をしてい

る。まあ、結果は全く現れないが。

「そっぴや、聞いとらんかったな、名前。なんて言うん？」

変わらない笑顔で、鬼月に話しかけてきた。

「オレは鬼月」

「わっちは水女雪野や。一応、水女一族の長やで。よろしゅうな、鬼月」

「ああ、よろしくな」

直感的に、鬼月は良い奴だと思った。仲良くなれそうな気がする。

「じゃ、わっちは紅のところに行くてくる。咲斗、鬼月、またな」

再び笑顔を向け、雪女は去って行った。紅の私室に向かったのだらう。

「アイツ、良い奴だったなっ」

「鬼月。あの方は雪女一族の長。敬語を使え。紅様も同様だ。それとも、敬語から教えた方がいいかつ」

さっきまでの青い顔はどこへやら。咲斗はいつも通りの五月蠅さを取り戻している。溜まっていたものを鬼月に吐き出すように、説教を始めた。

勿論、鬼月が聞いている訳無く、殆ど聞き流している。聞いていてもつまらなさそうなものは、聞かない。ボーッと、していた。

だからか、自然と昔の思い出が蘇える・・・。

『裏切り者の子』

『近寄らないで』

『汚らしい』

村の人達は、オレの事を冷たい目で見てきた。

それでも、オレは村の人達は嫌いになれない。いい子にしてたら、きつと認めてくれる。

自分と言う存在を。

だから、どんな事にも耐えたし、どんな事をされても笑った。
そして、ある時。村で病気が流行り始めた。不治の病だって、皆
言っていた。その病は、祟りだ、とも言っていた。

そして、村で生け贄を捧げる事になって・・・

オレが選ばれた。身寄りがいなくて、裏切り者の子だから。

そのまま追い出されるように、オレは崖から突き落とされ、死に
掛けた。それでも、自分の力で生き続けた。生きる意味が判らぬまま

ただ、体を動かして、

ただ、心臓を動かして、

ただ、口から呼吸をして、

判らぬままに生きてゆく。

自分の生きる理由を作るのは誰だろう。父？ 母？ 友人？ 恋
人？ 自分？ それとも、産まれてくる時に、神様という見えない
人に貰うもの？ オレには全然判らない。

存在していいものって何？ 存在してはいけないものって何？

存在と言うのは、人に認められなくては、駄目なの？

また、ある日。オレの前に男達がやって来た。

風臨一族の者。オレを迎えに来たって言って、連れて行こうとし
た。

でも、行きたくなかった。

何故？ オレの存在を認めてくれているのに、何故？

体が拒む。行きたくない、と。そして、オレは初めて人を斬った。
返り血を浴びた血まみれの体。罪の手。

罪悪感と同時に、不思議な感覚を覚えた。爽快とか、快樂とかじ
や無い。本能が目覚めた感覚。

怖い。また、人を殺してしまうかもしれない。

怖い。また、あの感覚が蘇えるかもしれない。

怖い。また、鬼になってしまいかもしれない。

だから、自分から人を寄せ付けないようにした。そうすれば、誰
も傷つかないのだから。

それでも・・・本当に、オレと言う存在を認めてくれる人がいるならば、その人に付いて行こうと決めた。誰が何と言おうとも、付いて行こうと。

(・・・紅)

自分の存在を一番に認めてくれた人物の名前を思い浮かべ、鬼月は小さく笑う。

その後も、しばらく咲斗の説教は続いたが、鬼月は適当に相槌あいづちを打って殆ど聞き流した。

咲斗から解放され、鬼月は一人、屋敷内を歩いていた。

赤く染まった夕日が、鬼月の姿を照らしている。

「鬼月殿」

「・・・お前、誰？」

突然声をかけられた。足を止める。

白髪交じりの黒い髪、義時だ。微笑みながら、近付いてくる。本能と呼ぶべきなのか、鬼月は少し警戒をしていた。いつものような柔らかい表情が固まっている。

「私は義時と言います。鬼月殿、少し、話でもしませんか？」

「・・・いいよ」

承諾すると、義時は歩き出した。鬼月もそれに続く。

「不思議なものですねえ、今、貴方がここにいる事が。私とて、予想外ですよ」

「ふうん」

特に、興味は無かった。ただ、義時には、心を許してはいけな・・・そんな気がした。笑っているその顔の裏で、何か嫌な事を考えているのではないか？ これは勘の為に、断定は出来ない。だが、鬼月は信じている。自分の勘を。

「・・・鬼月殿。貴方に兄弟はいましたかな？」

何故、そんな事を聞くのだろうか。やっぱり、怪しい。

「知らない、そんなの。オレはずっと一人だった」

影乱一族の者ならば知っている事では無いのか？ 獅氣と華蓮を殺めたのは影乱一族の者達なのだから。知っているはずだ。

「ほう……。一人だった、と言うのは、今は誰か信頼出来る人がいるのですかな？」

「なんで、そんな事を言わなきゃいけない訳？」

「そうですね。私が聞く事では無いかもしれませんがねえ。でも、私は貴方に興味がありまして。知りたいのですよ、貴方の事を」
背筋が、凍ったかと思った。

義時の微笑みが、一瞬だけ恐ろしいほどに不気味な笑顔に変わった。見れば、誰もが恐ろしいと思う。恐怖を植えつける。怖い。

自然と、足が止まった。それに気付いて、義時も足を止める。

「お前、何だよ……。オレの、何を知っている……。」

「さあ、どうでしょう。貴方が答えぬと同じように、私も答えたく無い事ぐらい、あっても良きものではないのですかな？」

小さく笑った後、義時は一礼して去って行った。

問い詰めようとも考え動こうとしたが、鬼月は足が動かなかった。誰かに掴まれているような、そんな感じ。そこに誰もいないのに。震えが止まらない。

“あの時”と、同じだ。

「つ……。もう、嫌だ……。」
忘れてしまいたい。

あの忌々しい記憶を。

第陸話

影乱の屋敷、紅の私室。

大量の書類、報告書と共に紅は待つていた。雪野が来る、と。どうせ雪野の事だから、また出発した後に連絡をよこしたはずだ。大体、連絡の驚が来る時はその一時間後、早くて三十分後に来る時がある。だが、普通の人ならば異常だろう。何故なら、驚が飛ぶスピードプラス空から行くが故に一番近い距離から行くのだ。出発した後から連絡を送っても、驚が来てから少なくとも一日後に来るはずだ。なのに、雪野は一時間と言う速さで来るのだ。足が速いで納まるレベルじゃ無い。異常以外に何があるだろうか。まあ、それは雪野にとって当たり前、普通なのだ。

それを、紅は知っている。だから今、待つているのだ。

…バアンツ！

突然だった。何の前触れも無く、襖障子が開いた。紅は、横目でその方向を見ながら、そこにいる人物を確認する。自分が思っている人物かどうか。

「今回は思ったより遅かったな、雪野」

「いやあ、遅れてすまへんな」

笑顔の雪野の姿。すぐに襖障子を閉じ、紅の前に座った。笑顔を崩さずに。

紅は、その笑顔を見てやっと向き合うように体を雪野の方へと向ける。珍しく、少し不安が顔に出ていた。だが、雪野はあえて、それを言う事は無い。自然に表情が出る事を、悪い事とは思わなかったからだ。

「手紙の事だが・・・」

「判つとるで、はよう聞きたいんやろ？ まあ、わっちも相談する

為に來たんやからなあ」

雪野の笑顔が崩れ、表情が強張った。どこか、睨んでいるようにも思えた。紅の表情も強張る。

「最近、水女一族の領地にいる人間が、消えるようになってる事が多いんや・・・」

一ヶ月ほど前の事。水女一族の領地の住人が何者かによって、誘拐された。

普通の家族で、特に悪行をした形跡が無い一家の長男が誘拐された。始めは、誘拐されたとして探していた。翌日。その誘拐された長男の死体が発見された。それは、とても無残な姿で。獣が喰いちぎったように体の肉が抉られ、心臓を抉られていた。死体の姿から見れば、獣の仕業だと思ってもおかしく無い。抉られたところから見れば、だ。

だが、それは獣の仕業では無かった。死体に、最近刃で切られたような切り傷があったのだ。人の仕業と思っていいるだろう。と言っても、やはり犯人は判らない。ただ、謎が増えたただけだ。

そして、またその翌日。水女一族の領地にいる人間が消えた。皆、無残な姿で。最初殺された長男と同じように。それが、何度も何度も続いた。

これで水女一族が調べない訳にはいかない。そう、調べた。周辺の住民の聞き込み、怪しい人物の特定。基本的な事は徹底的にやった。

その結果、判った事は一つ。水女一族の者では無いと言う事。たったそれだけだ。それだけ以外は判らない。自分の一族以外となると、情報入手は難しい。その中でも、さらに調べた。判った事は、風臨一族が怪しいと言う事。あまり表の知られぬ一族で、大きさも、強さも、規模も。全て謎に近い。

風臨一族の者が怪しいと思ったのは、その事件の後、風臨一族の使者がやって來た事が関係してくる。決してとても強いわけでは無

い水女一族に、今まで全く関係を持たなかった風臨一族の使者が来たのだ。怪しむ以外に何があるだろう。

使者は、ただ同盟を結びたいと言って、来た。ごく普通の条件。

一、互いの領地に踏み込む事を許す。二、戦には援助を行う。三、互いに連絡を取り合う。この三つ以外にいくつかの条件が重なって、同盟は結ばれる。これは、特に気にする事では無い。同盟を結ぶのに、条件が良ければ結ぶのは普通だ。でも、今は事件の後に来ると言う怪しさがある。すぐに同盟を結ぶわけにはいかない。だから、影乱一族の長。影乱紅に相談に来たのだ。

「——って、言う訳や。どや？ 判ったか？」

状況説明と、手紙に書かれていた不思議な事件について事。風臨一族が怪しいと言う事。まだ繋がっているとは言えないが、繋がっている可能性は高い。そして、その繋がりの中に、鬼月も混じっているのかもしれない。

「ああ、大体の状況は判った」

「わっちは、風臨一族が一番怪しいと思うとる。何故同盟を結ぼうとしているのか、何故人を殺す必要があったのか。普通に同盟を結びたいだけなら、人を殺す必要は無いはずやからなあ」

「ならば、風臨の者が殺し、それを隠す為に同盟を結びたいと言ったのでは無いか？」

「嫌、それやったら同盟結ぼうなんて言わないでええやる。逆に怪しまれるし、調べられてもおかしくは無いからなあ。やっぱ、何か目的があると思うんよ」

目的は予想からするに、何か水女一族に關係している事・・・と、考えてもいいのだが、もう一つ違う考えがある。水女一族に繋がっている、別の一族に關係しているのでは無いか、と。もしも、別の一族に關係した目的があるとしたら？ 影乱一族。一番大きく、最強と呼ばれる一族。

目的はなんだ？ 領地の略奪？ 最強の名を奪う為？ 風臨の存

在を知らしめる為？ 理由は大体こんなものだろう。どうせ、くだらない事。

（本当に？）

違う自分が話しかけてきているように、紅は思った。

自分の考える事は間違っている。そんな気がする。もっと、違う目的があるはずだ。では、その目的とは？ それは判らない。何も知らない。ただ、怪しい。確証が無い。それでも、やはりもっと違う目的。もっと、個人的な我がままのような・・・

「なあ、紅」

途中、雪野の言葉によつて、考えが止まった。無意識に下を向いていた顔を、雪野の方へ上げる。

「わつちが今持っている情報を、紅に全て話そうと思う。それと、わつちが消えたら、水女一族を、影乱一族が貰ってくれんか？ 氷^{ひよ}那^{うな}の事も、頼みたいんや」

「何故、突然・・・」

まるで、もうすぐ自分が死ぬような言い方。遺言のような、言い方だ。

「アハハッ。何となくや、何となく。わつちより紅の方が長生きしそうやからなあ。ま、とにかくは、今日も置いてきた氷那と、水女一族の事は頼んだで。ほれ、遺書の手紙もあるしな」

懷から手紙を取り出し、笑顔を作る。

強引に押し付ける形で雪野は紅に手紙を渡し、紅はしぶしぶ受け取った。これを受け取ったら、雪野が遠くへ行ってしまう。そんな気がして、紅は手紙を今すぐにでも手放したかった。別に手紙が理由で人が死ぬ訳では無いのに。何故？ どうして？ 答えは出てこない。自問自答など、無駄な事。ただの勘。

前と同じように、笑顔で喋っている。息をしている。心臓を動かしている。全てが普通では無いか。前と同じでは無いか。なのに、何故？ 何故？ 何故？

不意に、肩を軽く叩かれた。

「そんな暗い顔しとつたら、皆に心配させるで？ 笑顔や、笑顔。わっちは常に笑顔を心がけとるからな。紅も、表情柔らかくして笑顔や」

「・・・雪野・・・突然、消えたりしないよな・・・？」

声が震えている。不安なのか？ また、大切な人が消えてしまう事が。“今”が変わってしまう事が。自分の事なのに判らない。自分は今、どんな表情をしているだろうか？

「大丈夫やつ。何や、さっきの話で不安にでもなったか？ 心配性やなあ」

「そう、だよな。私が、ただ心配しすぎただけ、だよな？」

「そうや、心配すんな」

きつと、そう。自分の心配すぎ・・・。

自分に言い聞かせるように、紅は何度も自分の中で唱え続ける。まるで、無理矢理そう思わせるかのように。

（大丈夫・・・。私が、今を変えさせない。守ってみせる）

* * * * *

同時刻、影乱の屋敷鬼月の私室。

正式に影乱一族に入った為、鬼月は部屋をもらっている。十畳ほどの広い部屋。紅の私室とそう変わらない。

現在、鬼月は自分の部屋にいる。布団をしかずに、畳の上に寝転がり、ボーツとしながら天井を見つめている。特に何がある訳でもないが、面倒ごとやらを忘れるには、何も無いほうがいい。鬼月はそう思っていた。

それが、自分から目を背ける事でも。どうせ、逃れられない事なのだから。少しでも、一瞬だけでも目を背けたい。存在を否定される自分から、目を背けたい。怖いから。自分が負けてしまう事が。怖いから。鬼になってしまう事が。怖いから。“紅に、見放されてしまう事が”。

「・・・いつから、だっけ」

いつから？ 違う。目を開ける前から。息をする前から。産まれて来る前から。存在は、否定され続けた。だから、オレは認めてもらった少数の人から見放されてしまうのが何より怖い。自分の命と引き換えに認めてくれると言っのなら、喜んで命を差し出す。こんな自分、いない。

でも、それでは駄目だと、言った。顔も覚えてない、母が。目の前で処刑された、母が。生きる理由をくれた。

「『認められたいのならば、生きなさい』、か」

母の、華蓮の言葉だ。

きつと、死ぬまで自分に刻み続けられる言葉。忘れられない言葉。一人だった時は、毎日思い出していた。これが、支えでもあるから人であり続ける為の、支えだから。

「・・・誰？」

小さく、呟く。

突然・・・では、無い。何となくは感じていた、気配。それが、近付いてきたのだ。完全に、こちらに近付いている。しかも、気配を消しているようだ。敵意があるとは判らないが、何か用があるのは確かな事。鬼月は置に置かれた刀の柄に手を伸ばす。

いつ来てもいいように、素早く抜かなくてはいけない。

少し、沈黙が続いた。

「俺だ、鬼月」

「片目？」

声は、片目だ。でも、油断は出来ない。いつもと気配が違う・・・気がする。襖障子の外にいるから、自慢の嗅覚は役に立たない。どうする？ 中に入れるか？ その瞬間に襲ってきたら？

色々な疑問が刹那の間に頭に過ぎる。だが、それは本当に刹那の事。すぐにその考えを頭から無くした。迷えば、負ける。

気を抜いては駄目。刀の柄には手が添えられながらも、鬼月は明るい声で、

「入っていいよ」

と言った。

襖障子に手が添えられる。来るか？ 来ないか？ 判らない。迷うな、来たら、斬れ。

開いた。襖障子が、開いた。それとほぼ、同時。鬼月の刀が抜かれ、刃と刃が交じり合う音が響いたのは。

「やっぱり、だ。片目から毒の臭いなんてしない」

「バレてたのか。ま、俺的にはその方がいいんだけどね」

刀を交えるほんの一瞬前。確かに顔は咲斗だった。それでも、すぐに違うと判った。悪臭。薬品の、毒の臭いがしたのだ。咲斗がそんなものを使うとは思えないし、刀を交えた時に顔は空気に溶け込むようにして、変わった。

狐の面。怪しく笑う、狐の面が現れた。

「誰だ、お前」

「名前を知って何になる？ 知ったところで、お前は何も変われ無いのにさあっ！」

力が増した。このままじゃ、押される。潰される。鬼月は刀の力を緩め、擦り抜けるように狐面の男から距離を取る。怪我をした訳では無いが、今は危険だった。力押しであつても、あのままじゃただ追い詰められるだけだった。

「へえ……。ある程度は、出来るみたいだね。その目も、ちゃんと赤く光ってる」

「目……？」

（何を言っているんだ？ 目が光る何て、ある訳が……）

それでも、確かめない訳にはいかない。鬼月はそっと自分の目に触れた。何の変化も無い。いつもの鮮明な景色を映す目。では、他に何が違う？ それは、きっと自分では判らない。今まで気付かなかった。戦っている自分など、見ないのだから。

じゃあ、初めて紅と、咲斗と出会った時。刀を抜いた、刀を交えた。あの時の目は、どうだっただろう？

「何？　もしかして、自覚無しなの？」

小さく首を傾げる狐面の男。

「自覚・・・？」

「うげえ。説明しないと駄目？　面倒だからさ、何となく・・・直感で判って？」

「嫌、そんな事無理」

「チツ。まあ、いいや。バレなきやいい訳だし。それに、俺と相手してれば、きつと自覚ぐらい出てくるよっ」

狐面の男が、動く。刀が、風を切る。迫る、迫る、迫る。それは、一瞬。狐面の男は目の前にまで、来た。刀が鬼月の血を求めて振るわれる。それとほぼ同時、鬼月も、刀を振るう。交じり合う音が、響く。

力は互角。鬼月はとっさに距離を取った。そして、部屋の襖障子を破り、外へと出る。それに続き、狐面の男も外へと出る。

ゆっくりと、狐面の男が動く。それに合わせ、鬼月も動く。

緊張感が、全身を巡る。タイミングを、計らなくてはならない。

一撃で仕留められる相手では無くとも、傷ぐらいいはつけられる。それで、ここから去ってくれればいい。

狙うは腹。ゆっくりと、刀を引く。切っ先を、向ける。

考えるな、動け。本能で、動け。ただ、相手を狙え。

刹那、刀を構えたまま、狐面の男の動きが止まった。今だ、走れ。走りながら、引いた刀を押し出す。腹に向かって、突く。防御は一切していない。速さで負ければ、確実にダメージを受ける。それでも、突く。

後何メートル？　後何センチ？　後何ミリで辿りつく？

全ての考えを振り払う。距離なんてどうでもいい。避けたらまた喰らいつくのみ。攻撃を受けてもまた喰らいつく。ただ、相手に喰らいつく事だけを考える。

刀の切っ先が布を切り裂き、皮膚が切り裂かれる。

その、はずだった。

「!？」

鬼月は、確かに狐面の男を斬った。でも、手応えが全く無い。まるで、空を切ったように、手応えが感じられない。

「それじゃあ、俺は斬れないよ？」

背後からの声。刀を構え直しながら、鬼月は振り向いた。

そこにいたのは、狐目の男・・・の、はずだった。なのに、目の前には狐の御面しか無い。体が存在しないというのに、重力に逆らうように、浮いている狐の御面。

それと、いつの間にか周りの景色も違う。どこまでも広がる闇。

地は水面のように冷たく、水水しい。なのに、濡れる事が無ければ、沈む事も無い。光りは存在していなのに、狐の御面も手元も確かに見えている。不思議な空間。不思議な闇。

「君の為に用意したんだからさ、少し地面でも見て自分の顔を確認しなよ。きっと、自分の姿が映ってるから」

狐の御面は相変わらず浮いている。突然襲ってくるとは思えない。鬼月は膝を付き、ゆっくりと地を見る。そこに何が映るのか、知りたい。

「・・・これ、が・・・オレ？」

地の映る自分の姿。

目が、赤く光り、鋭い角が頭から生えている。そして、狂ったように笑みを浮かべる姿。それはまさに、

——鬼。

自然と、地に手が伸びる。触れようとした。地に移りこんだ、自分に。

だが、

…ガシッ!

「!?!？」

地から、手が伸びてきた。鬼月の手じゃ無い。人とは思えない白

い手。強い力で、しっかりと鬼月を掴んでいる。狂った笑みを浮かべながら。

『なあなあなあ、苦しいんだろ？ 人に認められない自分が嫌なんだろ？ 自分を認めない奴等が憎いんだろお？ だったら、殺しちゃまえよ』

「っ！」

『なんだよ、もしかして怖いのか？ だから、お前は弱いんだよ。力はあるのに、押さえ込む。ム力つく。なんで力を出さない？ 本気になれば、影乱の奴等全員殺せると思うぜ？』

笑っている。殺す事を望んでいる。影乱の人間を殺す事を望んでいる。紅も、殺すのか？

紅は両親を殺した奴の子供かもしれない。でも、大切な人では無いか。守りたい人では無いか。それなのに、自分の手で殺すのか？ 『そんなに臆病なら、俺が殺してやるよ。お前の代わりに』

近づく、近づく、近付いて来る。腕から顔、首、肩、胸、胴、膝、足……。

出てくる。白い、鬼が。

「なんで……お前、は……殺そうと、する……？」

『ああ？ んなの、俺がお前だからに決まってるんだろ。俺はお前の憎しみの感情。殺したいってお前が願ってたんだよ』

「……そう、なのか」

『んじゃあ、お前は少し眠って』

…ザシュッ！！

白い鬼月の言葉を遮るように、鬼月の刀が振るわれた。

刀の刃は白い鬼月の皮膚を破って、赤い血を流させた。白い鬼月はよろめきながら、鬼月から離れていく。その間に鬼月は刀に付いた血を飛ばし、もう一度、構える。

痛みに表情を歪めながら、斬られたところを抑える白い鬼月。だ

が、すぐに白い鬼月から変化があった。空気に溶けるように、全体が変化した。そして、その代わりに狐の御面が現れた。

「気付かれてたんだ・・・」

「・・・もしも、オレが本気で殺したいって思ってるなら、オレは自分で自分を殺す。もう、大切なものを消させない。絶対につ！」

鬼月は、走る。狐面の男に向かって、走る。

刀が、狐面の男に首に当たる寸前。鬼月の動きが、止まった。自分で止まった訳では無い。何かに縛られているように、体の自由が利かない。

「動か、ない・・・」

「なあに、勝手に行動してんだ、狐」

「!!!」

突然現れた、少し長めの髪を後ろで結った男。腰には、刀が二本ある。鬼月の動きを止めたのは、この男だろうか。

男は鬼月を横切り、狐面の男の方へと歩く。

「ったくよ、輝月から動けって言われてねえだろ。迎えに来るこっちの身にもなれ」

「夜・・・。輝月が、俺を迎えに行けって言われた？」

「嫌、俺自身の単独行動。後で桜に傷を見てもらえ」

「えー・・・、桜って夜と輝月しか優しくしないじゃん」

「知るか」

呆然とする鬼月をよそに、夜と呼ばれた男と、狐面の男は会話を続けている。普通の日常会話のように。

「じゃあ、帰るぞ。悪かったな、えー・・・お前、名前は？」

「・・・」

答える気にはなれなかった。

ため息をつき、夜は狐面の男を担ぐように持ち上げる。

「またな」

闇に溶けこむように、夜と狐面の男は消えた。それと同時に、周りの闇も消えてゆく。元の場所に、戻ったのだ。

「・・・」

さっきの男達はなんだ？ あの手はなんだ？ オレはなんなんだ？ 判らない事は沢山ある。

そつと自分の目に触れ、鬼月は空を見上げた。

どうか、このままの普通が続くように・・・。
空に、願う。

第漆話

紅は、すぐに屋敷の異変に気が付いた。

大きな物音がする。鬼月の部屋の方からだ。勘ではあるけれど、咲斗に追いかけられている時の物音とは違う。誰かと、戦っている気がする。

雪野と共に、紅は鬼月の部屋へと向かった。

鬼月の部屋の周辺などは、人がいない。だから、狙われるとしたら鬼月だろう。影乱一族の者達が、裏切り者の子と隣の部屋は嫌だと反対した為に鬼月の周辺には人がいない。諦めの悪い奴等だと思いつつも、紅は仕方無く鬼月を少し離れた。

それでも、紅の部屋より近い部屋の者は幾らでもいる。それでも騒ぎになっていないと言う事は、皆が無視をしていると言う事になる。

後で叱っておかねば、と思いつつ紅は足を急がせる。

何も無ければいい。勘違いであってほしい。

「鬼月っ！」

すぐに、鬼月の姿は見えた。

軽く目を押さえながら、空を見上げている。

見たところは、怪我は無いようだ。その事に安堵しつつ、鬼月の方へと駆け寄る。

「紅・・・どうしたの？」

何も無かったように振舞っているのか、無理に笑顔を作っている。それも、誰にでも判りそうな作り笑顔。

「鬼月、ここに誰か来なかったか？ それと、物音がしたんだが」

「・・・紅。オレと最初に会った時、オレの目は・・・何色だった？」

目の色・・・？

「知らなかったのか・・・？」

最初に出会った時の目の色。それは、赤だ。ただの赤では無い。光を放つ、赤い目。それは、何故赤く光るのかと疑問を持っていた。鬼月が知っていると置いていた。でも、今の言葉を聞く限りでは自分で知らないと言っているようなものだ。鬼月は、何も知らないのでは無いのか？

鬼月は、反応を見せなかった。頷く事も無ければ、言葉を発する事も無い。ただ、無言にして微動だにする事は無かった。つまり、そつだと言っていると同じだろう。

「お前は、自分自身の事をどれだけ知っている？」

「自分、自身？ オレは、何も知らないし、判らない。ただ、オレは紅と一緒にいちゃいけない。ここに、いちゃいけないんだ・・・」
「何を言っているんだ？」

「ごめん」

それは、目で追えぬ速さだった。鬼月は、まるで瞬間移動を思わせる速さで紅から距離を取り、屋敷の堀へと後ろ向きで跳躍する。止めるすべは無く、鬼月は笑顔を紅と雪野に向けると、堀から影乱一族の屋敷の外へと行ってしまった。

「鬼月っ！」

叫んでも、止まらない。戻ってこない。行ってしまう。なら、自分の足を動かさなくては。

紅は、ただ走った。鬼月を追いかけて、ただ走った。雪野が止めるのも聞かずに、ただ走った。

声は、音は、聞こえない。こんな気分は久しぶりだ。誰かを追いかけるなんて、久しぶりだ。この感情は、感覚はいつ感じたものだろうか？ 懐かしい。

手を伸ばしても届かない存在を追いかけたのは、いつだったろう？

（突然、なんなんだっ・・・！）

ごめんと言っていた。何故、謝る？ 判らない。判らないから、理由を知りたい。鬼月を止めようとする訳では無い。ただ、正当な

理由がほしい。それが無ければ？ そんな事は無い。無意味な事を
する奴では無い。

理由がある。理由があるから、鬼月は自分の考えで動いた。本当
は聞くべきでは無くとも、知りたい。知らなくてはいけない気がす
る。そして、その理由を知った上で止めるか止めないかは判断する。
それが、今一番自分にとつてやらなくてはならない事だ。

追いかけている内に、鬼月は竹林へと入っていった。ここで巻く
つもりか、あるいは・・・戦うつもりか。どちらでも同じ。追いか
ける事には変わりはない。

どんどん奥へと進んでいく。どこまで行くつもりか、それとも止
まらぬつもりか。

突然、鬼月の足が止まった。自然と紅の足も止まる。

紅に背を向けたまま、鬼月は口を開いた。

「・・・なんで、追いかけてくる？」

「理由が知りたい。お前が、私の・・・皆の前から立ち去る事を」

「それは、やっぱりオレはあそこにいい存在じゃ無いから。自
分で立ち去ろうって思」

「嘘だな」

鬼月の言葉を遮り、紅は一步一步と鬼月に近付く。

「お前は、鬼月は自分の言葉を曲げたりしない。たとえそれが本当
だとしても、私が鬼月を影乱いていい居場所を作る。それでは、駄
目なのか？」

一步一步近付く。距離が、縮まる。それでも、鬼月は動かなかっ
た。

手を伸ばせばもう届く。紅は、手を伸ばして、鬼月の背にそっと
触れた。今にも壊れてしまいそうなものを扱うように。そっと、触
れた。

「何故本当の理由を言わない？ 私が来る前に誰と会った？ 私で
は不安か？ 頼りないか？ それとも、信用できないか？ 過ごし
た時は短くとも、私は鬼月を信用している。だからこそ、理由を知

りたいと思うんだ」

口から自然と出た言葉。頭で色々考えるより、普通に思った事を口にした方がいいと思った。

今、鬼月どんな表情をしているだろう。見る事は叶わない。ただ、自分のこの思いがちゃんと伝わってくれればいいと思う。それだけだ。

「・・・オレがいると、大切なものが傷つけられる。それは、嫌だ。紅が来る前に会ったのは、狐の御面を付けてた男。突然襲ってきた。オレの事を、知っていた。多分、オレを狙っている奴だと思う。そうでは無くても、オレがいなくなる事で影乱一族の人達も・・・安心すると思う。だから」

「自分だけ逃げるのか？」

沸々と湧き上がる感情を抑えながら、紅は鬼月の服を掴む。感情を抑える為の行動と言ってもいいだろう。

この感情は、鬼月に対して怒っているのだろうか？ 全てを投げ出す鬼月に対して、怒っている？

「逃げて、全てを私達に押し付けるのか？ それが、思いやりだと思っているのか？ 本当にそうだと思っているのなら・・・勘違いしないでほしい。もう、私と鬼月は無関係では無いんだ。既に、同じ道を歩んでいる」

全て、事実だ。

まだ、雪野にしか相談はしていない。それも、相談したと言っても一部の事だ。全てでは無い。

いつか言わなくてはいけない。判っていても、言えない。この言葉でいつもの普通が壊れてしまったらどうしよう。そんな不安が込み上げてくる。本当は、言うべきなのに、言えない。

でも、これは今言わなくてはいけない。もう、同じ道を歩いている。戻る事は許されない。共に、歩くべきなのだ。

「私達は狙われている。恐らく、風臨一族・・・鬼月の父親の一族に、だ。まだ目的は判らない。判っている事は、狙われている事・・・

・それだけだ」

「それでも、オレは・・・」

「行くなら、行けばいい。私は止める資格など無い。決めるのは、鬼月自身だ。自分がどうしたいかを、よく考えてくれ」

紅は鬼月から手を離し、ゆっくりと後ずさって、背を向けた。

少し、沈黙が続いた後、紅は歩き出す。鬼月を置いて。

* * * * *

「いやあ、紅は鬼月にホレてるんか？」

「知りません」

「アハハッ、悔しいんか？　せやなく、昔から思い続けっとったかなあ、負けたくないんやろ？」

「・・・違います」

影乱の屋敷、紅の私室。

そこに、雪野と咲斗がいた。

鬼月を追いかけて行ってしまった紅を追いかける訳では無く、雪野は残った。そして、後から咲斗が報告書を届けにやって来て、今の状態だ。

二人とも、紅が戻ってくるのを座って待っている。

「にしても、紅は変わったもんやなあ、昔に比べて」

「・・・」

確かに、紅は変わった。

前の紅ならば、一族の者達に長としての意見は出しても、個人的な意見を出す事は少ない。ただ、長としての役目を果たしていればいい。自分はどうせ、繋ぎなのだから。そう思っていた事だろう。実際、一族の者達は紅を繋ぎとしか思っていなかった。咲斗を除いて。

鬼月に出会って、自分の意見を出して、正式な長となった。繋ぎでは無く、正式な長。

それに関して、咲斗は悔しいと思っている。

自分は何も出来なかった。鬼月が紅を変えた。

少し、嫉妬もしている。馬鹿らしいと分かっているながらも、嫉妬してしまった。己がまだ未熟だと、思った。

「・・・立場とか気にしといたら、負けるで？」

「別に、俺にはそんなつもりありません」

「ハハハッ。じゃあ、これはわっちの思い込みアドバイスと思って聞いとつてな」

笑顔を作る雪野。

冷静な表情で無視をしていると見せかけて・・・一応、耳を傾ける咲斗。

そんな咲斗の様子を分かっているのはいないのか。雪野は、口を開く。

「紅はなあ、分かつと思うけど、強がりなんや。いつも、自分の気持ち殺して、怖い時だって胸を張っている。強い振りして、本当は誰よりも、支える人を必要としとる。わっちが支えになつとるかは分からんが・・・少なくとも、咲斗は支えになつとると思うんや。いつも紅の傍にいて、きちんと、紅自身を見てくれる身近な人物・・・」

一度、咲斗を見やり、雪野は咲斗の表情を確認する。

咲斗は、照れくさそうに頬が少し赤かった。

自分では、冷静な表情を作っているつもりかもしれないが、それでも少し頬が赤い。

こんな堅物でも照れるものなんだな、などと思いながら、雪野は再び口を開く。

「きつと、鬼月も紅にとって支えになってくれる人物なのかもしれない・・・でもなあ、咲斗とは過ごした時間が違う。今までの紅を見て、そして、今の紅を支えてあげればいいと思うで」

今の紅を支える。

それが、どれだけ大切な事か。

正式に長となったと言っても、まだ認めていない者は密かにいる。それに、影乱一族に挑む者が少ないとは言え、全くいない訳では無い。紅の命を狙う者もいる。

そんな不安を、紅一人に背負わせてはいけない。支える人達が必要だ。紅自身を見て、支える人物が。

「・・・俺は、紅様の補佐。支えるのは、当然の事です」

「その当然が、いい事なんやで」

「補佐としての役目を果たしているまでです」

そっか、と呟き、雪野は襖障子の隙間から見える空の景色を見上げる。

空が、赤い。雲が無く、夕日がとても綺麗だ。

今だけでも、こんな幸せが続くように。この夕日を、もう一度見られるように。

ただ、空を見つめ、雪野は思った。

そして、その一瞬の事だったろうか。突然、“それ”は現れた。言葉を発する前に、そして、ほんの小さな気配に気付いた瞬間に、雪野と咲斗は刀を抜いた。

その気配から逃れるように、襖障子から飛び出し、雪野と咲斗。それと、もう一つの気配が互いの姿を目で確認した。

「アハハハッ、始めましてえ。私の名前は、桜って言うの」

* * * * *

同時刻、紅は影乱の屋敷へと帰る途中だった。

人気の無い道を歩き、鬼月の事を考えながらも、置いて行ってしまった雪野の事も考える。

本当は無理にでも連れ戻すべきだったか？ それとも、そのまま行かせてやるべきだったのか？

鬼月の道を、自分が口を出すべきでは無かったのではないのか？ 色々悩んでいると、自然と足が止まった。無意識に、だ。

「私は、どうすれば良かっただろう・・・」

悩んでも答えは出ない。考えたとして、その答えが出ても、悔やむしか無いのだから。

首を振り、紅は考えを全て振り払う。

（駄目だ駄目だ。こんな事を考えたって何になる）

もう、終ってしまった事。その結果、鬼月と二度と会えなくなつたとしても、それはそれで仕方の無い。自分が選んだ道なのだから。

（ああ、でもやっぱり・・・）

何も言うべきでは無かったのかもしれない。

一度悩み始めると、答えが出るまで中々止まらない。

自分の性格を恨みながら、やはり紅の悩みは頭の中で自然と考えてしまう。

真実を言った事は確か。

狙われている。もしかしなくとも、前にやって来た桜も関係している事だろう。それと、一週間ほど前に会った毒針の事もそうだ。

紅の命を狙った集団は、最後、誰の命令かを聞く時に殺された。まだ、誰かは分かっているが、関係している人物の一人だろう。

その人物の一人に、鬼月は直接会って、話をした。その話の内容は流石に分からないが、鬼月自身の事だろう。

自分自身の事を知って、鬼月は逃げる事を選んだ。

その道が間違っているとは言えない。鬼月は、正しいのかもしれない。逃げたら、全てが謎のままで終わってくれるのかもしれない。

謎でも、終って平和ならば良いのでは無いか？

だが、紅は違う。謎のままで、平和になっても納得出来ない。謎を抱えたままで生きていくのは、嫌だ。全てを知って、解決したい。鬼月はそう思わないのだろうか？

人の考えは違う。そんな事分かっている。それでも、真実から目を背けて生きられる、鬼月の考えが分からない。自分の事を知りたいと思わないのだろうか？

同じ道を歩んでいるのに、隣に立っていたのに、背中を押してく

れたのに。紅の、影乱の為だと言って逃げた。逃げようとしている。とても腹が立つ。

もう、止めるべきとか放って置くとかは、どうでも良い。

ただ、紅自身が思っていた人とは違った。それだけでは無いか。それが、答えでは無いか。

「・・・はあ」

（たったそれだけの為に悩んでいた自分が馬鹿らしい・・・）

鬼月は自分が思っていた人物とは違った。紅が何をしようと、良かった。止めようが、放っておこいが、鬼月は変わらない。結果も、変わらない。

無意味な行動。決まっていた運命。

「何も、変わらないな・・・」

紅が再び歩き出そうとした、刹那。

「やあ、紅」

何かが、背後にやって来た。

すぐ傍に居るのは、分かるのに、全く気配がしない。動けない。

金縛りにでもあったかのように、動けない。動かそうと思えば動けるのかもしれないが、背後に全く気配のしない何かがいるかと思うと・・・動けない。

「っ・・・！ 誰だ」

「僕の名前は、輝月。風臨輝月だよ。紅と同じで、長をやってる。

同じ長だし、仲良くしようよ」

顔は見えない。気配もしない。人なのか？

警戒しながら、紅はゆっくりと刀の柄に手をやる。いつでも、抜けるように。戦えるように。

「同じ、長？ ならば、敵だろう？」

口が、重い。緊張で、震えている感覚だ。

「そうかもね・・・。でもね、それは違うよ。僕等は同じなんだから」

「同じ・・・？ どういう意味だ。それと、鬼月が戦った、狐面の

男は・・・お前の一族か」

「アハハッ、そうだよ。ごめんね、狐はいつも勝手に行動しちゃうから。一週間ぐらい前かな？ 紅を襲った奴等いたでしょ？ アレ動かしたの、狐なんだよ。最後のを殺したのも。後できつく叱つとくから。同じって意味は、そうだな・・・。紅が、僕に付いて来てくれるなら、教えてあげる」

付いていく・・・？

その意味が、紅は一瞬分からなかった。

影乱一族の者達を裏切つて、輝月と名乗る人物に付いて行く。

「冗談じゃないっ！ 私が、一族を裏切ると思ふのかっ」

「じゃあ、知らないままでいいの・・・？」

輝月の口調は、まるで誘惑するかのようだった。

紅の性格を知った上で、言っているような気がする。

「っ・・・！ ならっ、私は自力で知ってみせるっ。お前の力など借りなくとも、私には仲間がいるんだっ！」

「ふうん・・・。なら、さ。そのお仲間さん達が全員消えたら、僕に付いて来てくれる？」

「何・・・？」

「ホントはさあ、もつと時間をかけなきゃいけなかったのに・・・。狐が動いちゃうから。まあ、狐にはしばらく痛い思いをさせるけど、我慢してくれると思うし・・・。きっと、桜がお仲間さん達を消してくれるから」

それは、とても突然で。

紅は、今の自分の立場が判らなかった。

今、何が起こっているのか。

今、誰が危険にさらされているのか。

今、輝月の言葉が何を意味しているのか。

ゆっくりと、幸せが壊れていくのを、紅はただ見ているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0902v/>

影乱の紅

2011年12月25日13時47分発行